明治四十二年一月三十日發行（毎月一回二十日發行）

January 20th 1909.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 201

大日本蠶絲會報

第貳百壹號要目

▲本邦蠶界之奇傑 角田喜右作君▼

●蠶絲業の安息日　學藝委員 吉池慶正

●蠶翅の發達に就て　東京蠶業講習所技手 高橋伊勢次郎

●困つた問題は同種異名と異種同名　評議員 角田喜右作

●蠶絲業と日本國民の經濟　法學博士 松崎藏之助

●吾社は如何にして製品を統一するか　下仁田社長 佐藤量平　農學博士 門前弘多

●四十一年蠶業界の回顧

●繭質の惡くなつた原因　高山社蠶業學校教諭 小林薫二

●聖旨に感泣す　水戸福利主任 加藤知正

●蠶種改良と卵形又昔　埼玉縣農事試驗場技手 水野辰五郎

●六十日間の旅行管見　評議員 八田達也

●大都市に於ける蠶種の貯藏は如何にして經營せらるゝか　帝國冷藏株式會社專務取締役 高橋虎太

●予の視たる印度の蠶絲業　農學士 須田金之助

●桑園の改良は如何にして爲すべきか　群馬縣老農 中山重兵衛

●桑園年中行事　愛媛縣農學校教諭 池田榮太郎

●鳥取縣の蠶業　特別會員 遠藤岩太郎

▲上毛の製絲改良者 齋藤正次郎君▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

▲雪中松（御題）

御製

としとしにゆきをかさねておいまつの
みさををたかくもなりまさりけり

皇后宮御歌

きみかよのちよをかさねてふるゆきに
いよ〳〵たかくみゆるまつかな

特許 中原式生繭乾燥器 中原式煮繭器 伊國 佛國 特許出願

○本乾燥器は生繭乾燥器中の大王と稱せらる本器は大小數種に分つ即ち小形は一回壹石五斗入より三石入六石入大は拾貳石入、四拾八石入、貳百石入等にして蒸汽と火熱の兩式ありて棚枠と旋風器と相待て回轉す

○本煮繭器は煮繭と繰絲を分業にして生產費を減少し繰絲時間を短縮し絲量を多く出ださしめ且つ燃料を減ずる上に於て世界唯一のものとす

○本器は繭の煮加減均一に宜しき爲繰絲中落繭せざれば絲量多く繰絲神速なる事を保證す

○本器御試驗の爲八拾人繰以上の製絲家に於て据付方御望みの方へ本器壹臺と繭煮方熟練の男工壹名相添三週間御貸與可申上候實地御試用の結果良好にして利益あるものと御認定の節は更に御相談可仕候若し不結果にて御戻し有之候共決して異議無し

○說明書御請求の節は乾燥器又は煮繭器と書分け御通知相成度直に呈送す

特許中原式生繭乾燥器
特許中原式煮繭器

東京市本所區御石衛門町三ッ目橋通
製作販賣所
電話浅花二貳二六番電報（ナカ）振替貯金口座一六五〇四

大日本蠶絲會報　第二百一號

目次

口繪

●大日本蠶絲會評議員角田喜右作君●下仁田社副社長齋藤正次郎君●帝國冷藏庫株式會社築地貯藏庫並同社機械室●故大日本蠶絲會理事星野長太郎君

論叢……一―一三

●蠶絲業の安息日　學藝委員　吉池慶正

●蠶翅の發達に就て　東京蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎

●困つた問題は同種異名と異種同名　評議員　角田喜右作

演壇……一四―一八

●蠶絲業と日本國民の經濟　法學博士　松崎藏之助

集芳……一九―二八

●吾社は如何にして製品を統一するか　下仁田社々長　佐藤量平

●四十一年蠶絲業界の回顧　農學得業士　門前弘多

●滿蠶の惡くなつた原因　高山社甲種蠶業學校教諭　小林薫二

●聖旨に感泣す　本會編輯主任　加藤知正

●蠶種改良と卵形又昔　埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

叩門……二九―三九

●六十日間の旅行管見　評議員　八田達也

●大都市に於ける蠶種の貯藏は如何にして經營せらるゝか　帝國冷藏株式會社專務取締役　高橋虎太

●予の視たる印度の蠶絲業　農學士　須田金之助

●桑園の改良は如何にして爲すべきか　群馬縣老農　中山重兵衛

實務……三九―四一

●桑園年中行事　愛知縣農學校教諭　池田桑太郎

●鳥取縣の蠶業　特別會員　遠藤岩太郎

通信……四〇―四一

心影……四二―四六

●本邦蠶界上の恩人　●故人の面影　齋藤正次郎君　角田喜右作君

絲場……四七―五二

●横濱市況　●問答……五三―五六

●秋蠶種の浸水及其他の件に就き質問並答●乾繭器に就き質問並答●屋穴蠶種の變態に就き質問並答●蠶兒の消化運動及其他の件に就き質問並答●蠶兒の消化運動及其他の件に就き質問並答●蠶種に就き質問並答●繭に就き質問並答●發送給與に就き質問並答●交尾時間及其他の件に就き質問並答●秋蠶飼育に就き質問並答

孤蚕評論……五七―五八

●所謂女工の際の源＝人間最高の樂＝農業政策＝水產銀行＝經濟上より見たる耕地整理

會務錄事……五八―五九

●支會長以下の囑託＝地方委員部幾員の囑託＝通信委員の囑託＝特別會員の推薦＝關稅調査委員の選定

蠶桑雜觀……六〇―六一

●蠶業大辭書乙夜の寢を賜はる＝米穀運賃と影響＝蠶網課稅問題の成行＝蠶絲專門學校＝面白き換算法

雜囊……六一―七〇

●伍廷井上將軍の皆氣焰＝塞中の白眉＝健康を失つては遺憾を遺れ＝ヤー譚つた亞蓮館＝男女兩性

●文藝●蠶海消息●新刊紹介●寄贈書目

次號目次

●米國の養蠶は果して有望なりや　同仁社社長　高木三郎
●乾燥の方法及原料に就きて　東京蠶業講習所教授　小松豊作
●婦人と養蠶　生駒つね子
●世人の知らんとする甘樂社は如何に組織せらるゝか　甘樂社長　山口太三郎
●何故にポッチ裏を勧むるか　高田社長　町田菊次郎
●事蹟に受賞されたる大成社　加藤知正
●蠶絲業と日本國民の經濟　法學博士　松崎蔵之助
●桑園の改良は如何にして爲すべきか　中山重兵衛　石田孫太郎　水野辰五郎
●日本女性蠶業史
●明形又昔と種類改良
尚此他堀正太郎林驥作辻暢太郎土屋泰町田儀橋田長太郎野村彦太郎の諸氏寄稿を約せられたれば刮目して見るべきもの多々をふ次號の發行を待て

蠶絲業に關する寄稿及寫眞を歓迎す

但寫眞の返還を望まるゝ方は其旨御申越へありたし

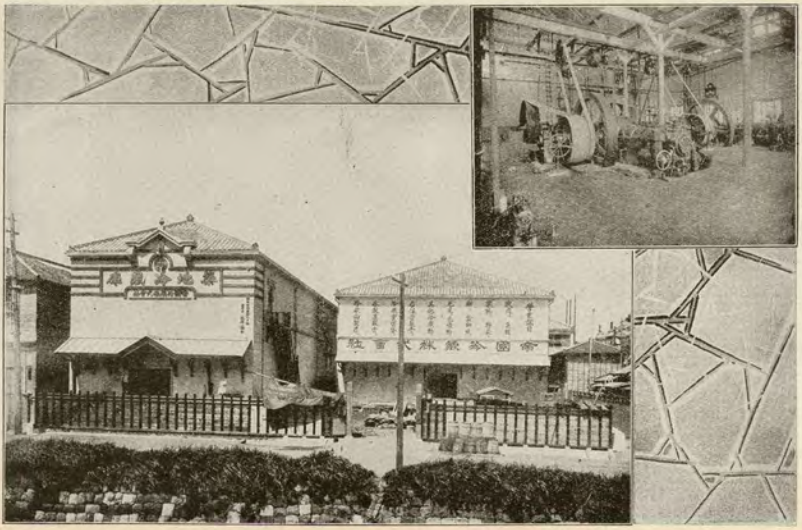
大日本蠶絲會

君作右衛田角　貴議評會蠶業大日大
M. K. Tsumoda, Conseiller de notre Association.

君郎次正藤齋　長社副社田仁下
M. S. Saito, Vice-President de la "Shimonitasha."

帝國冷藏庫株式會社機械室
Chambre des machines.

帝國冷藏庫株式會社築地冷藏庫
Magasin rafraichisseur de Tsukiji.



故大日本蠶絲會理事星野長太郎君

Feu Monsieur T. Hoshino, Administrateur de notre Association.

吊辭

大日本蠶絲會理事原野長太郎君義に二豎の侵す所となるや撫養其たゆまざりしを遂に遺憾の詠嘆を發せざるを得ず謹て鳴呼真製君夙に心を蠶絲業の改善材進に傾注し結構經營巨萬の私財を擲ち或は率先器械製絲場を設け或は座繰生絲の製法を改良し共同販賣の法を設けて當業者に博愛の典へ或は歐米清國等の蠶絲業地を政況して其の得失を研鑽し當業者に警戒を加ふる等斯業に貢獻すること實に四十有餘年本邦蠶絲業界の泰斗として一世に仰望せらるるに至る殊に明治九年全國新井領一郎君と共に組織し蠶絲直輸の端を啓き爾後數時損の任に當らしめ遂に直輸貿易を為して現今の發達に至らしむるの基礎を樹てたるか如き知は須らく本邦蠶業史に特筆すべきことなりと雖も其博愛的共進會等の審査官等の選に當り共に略賞を受うせられ君か公共の事に忠實なる此の如く蠶絲の業に熱心なる此の如き洵に世の師表となすに足るを以て遺族に恩授賞賞を及て本會は勿論すでり而して明治三十七年以來大日本蠶絲會理事の任に當らるゝや風夜本會の為に奔走し其發展に貢せられたるの勞奔大なるものあり將來の金鵄經營に對し益君に待つ所多かりしに悲風一陣盜殺として遂に明暗世を異にせり君の逝去は實に本會の為に惜むのみならず眞に斯業に本會の代表し難く吊詞を呈する所以なり

明治四十一年十二月四日

大日本蠶絲會々頭正三位勳一等男爵　松平正直

大日本蠶絲會報　第貳百壹號

論叢

蠶絲業者の安息日

學藝委員　吉池慶正

安息日〳〵此の言葉は空々〳〵看過され易いが、若し三遍繰返したならば、其終りには誰れでも無限の意味、絶大崇高の感想が胸の奥、頭の底に湧つて、思はず知らず總身に力が入り、拳は握られ肉搏りをするを覺るだろうが、嘘と思はれたならば試みられんと望むのである。嘘、安息日は夫れ程意味があるだろうか、然り意味があると思ふ、唯一遍では注意は引かぬが、三遍繰返へすに依つて深い注意を惹き起すのだ、地震の顔も、三度と云ふてはないか、我輩の思ふには、此絶大崇高の感想に打たるゝのは、此の言葉の中に、不退轉の勇氣と無窮の進化、無窮の向上なる大活動の分子が、靜かに潜んで居るからではあるまいか、動中に靜あり、靜中に動ありとすれば、安息日は正に是ではあるまいか、例へば最初少かな水の一波が、高と一低とを經る間に、遂には怒濤岸を噛み、岩をも碎く勢になる、其最初の一波が安息日ではあるまいか、斯く思ひ來れば、國家無限の生命も、此の安息日の内に懸つて居るではありますまいか、國家無限の生命が懸つて居るとすれば、

蠶絲業者にも安息日が欲しい

假りに、天と地とが變る時代があるとするも安息日の意味は變らない、變らないから蠶絲業者にも欲しいのである。人間は、活動する爲に生れて來、活動上に來る辛苦を味はんが爲に生れて來たのであるが、左らばとて活動の仕續けでは、辛苦の味が眞味に味はれるものでない、味はれないと同時に、心力も盡きて、生れ來た目的を充分に遂くることが出來ない、大なる活動を爲さんとせば大なる休息を要することは辛苦を味ふ本旨を遂ぐる上に於て、必要のことである（一寸瞬て觀るが、人間は苦痛を去らんが爲に活動するのではない活動せんが爲に苦痛を去るのである）例へば機械でも、折々油をさゝなければ圓滑に永く動かしむることは出來ない同じことであるが、茲に蠶絲業者の爲に安息日が欲しいと云ふのは、機械に折々油を注ず樣な、或は學校や役所に於る日曜日の如き安息日ではない

日曜日の様な機械に在つても、チョイ〳〵油を注ぐ如き安息日ならば、蠶絲業者は順用さるべき機械の手入れ、修繕の如き、安息日である、機械の大掃除は過去に於て、修繕の如き、何人をして、動きを爲さしむる様、大掃除を行ふてするではないか、蠶絲業者の爲に要求する安息日は正に是である、過去の蠶絲業の發展が、蠶絲業者の爲に、最も安息を得べく、要する安息日を作り出すことに勉めて貰いたいと思ふ、國運の發展が、蠶絲業の發展に待つ、前途の活動を、より多く有效ならしむるのでなければ効能がない、安息日の崇高絶大なる意味は、此點に在るのである、過去の實蹟を、省みなければ進化向上はしない、此點に於て、單純の慰安とは趣きを異にして居る、國運の發展に待つ大なりとせば、官民一致して如上の安息日を作り出すことに勉めて貰いたい

若し作り出すとすれば

適當の區劃範圍内で行ふべきだが、行政區劃に依れば各府縣内の區劃に依れば各支會の區域に依るのであるが、前段と此區劃内で年々品評會を開くとするのである、斯くしたなら、果して前段述ぶる處の安息日の絶大、至高なる目的を達し得べく、絶大なる目的を達し得べく、之を信じて疑ひませんに、本會の支會に行ふ

品評會の特色

に既て説明せねばならぬが、其特色とすべきものが二つある

一つは出品區域を支會の範圍内として居るけれども、他の支會から出品が相互の交際上、出品する者の有力なる出品物が、支會の品評會に要求する條件の如き、良品を發展の動機と興ふる材料となる元より一支會の爲に良品を發展の動機と興ふる材料となるべきものであるが、其上に他支會からの出品が、浦を注ぐ如く、改良の資源は實に大なるものである、何故なれば他支會から、出品するものは、何れも胸に覺さのあるものであり、一二等の撰に入るべきを、期して來る、精良品が多い、昔して云へならば、士の道場に成るが如く、金看板外しである、得て劍士にも天狗は多いが、蠶絲業と來たら夫れ以上だ、自稱天狗の多いのは、敢て悪支にもならぬが、又冤るべからざる處で、之が根絶は、大なる敵いが道場に成りとの、脆北べ になると、之が有力の參考になり、開發の資となることは多大のである、之が特色の一つ……も一つは、各支會品評會に出品したものは、全部寄附することになつて居る、中に特殊の例外も、あるが多くは寄附である、此出品物の寄附は、一府縣の品評會を開くに當つては、必ず金員の寄附を受ける、又府縣に補助を仰ぐ時は、依つて永續い、夫れ故に本會は、又支會の品評會は、獨立經濟に依りて問催し、得ると云ふことにした、各會は、公共心に訴へて金員の寄附を仰ぶねばならぬ處あるが、支會問催の當局者のやり方に依つては、出品物のみで餘りあ

る處ある、之も慨かに他の品評會に見ることの出來ない特點てはないか、之が特色の一つであるが

特色中の特色

とも云ふべきは、品評會が濟んで、若き情を受けぬことだ、我々は實驗上、農業の改良、蠶絲業の改良發展を達し得ると信じて疑ひません、之を説明せんには、本會の支會に行ふ品評會に見ることの出來ない特點之が特色中の特色、西州屬の特色である

過去の成蹟と聲援

右の如き特色あるが爲か、將た品評會は支會活動の、大手段と認められるゝのか、兎に角年々其間に、數を增して、前年度に於ては、各地に開催せられたが、何れも良好の成績を擧げつゝある、故に本會でも、之に大々的聲援を與へ、益々之を發展せしめて、蠶絲、支會の發展を促し、改良と、同時に勉めて居ります、右の次第で、最も許會規則を改正しました、即ち一種類に就て、最も優等なる者を、一點宛撰び出し、此優等賞者に對しては特に

貴重品の御下賜

を請ふことになりました、只今の處會務も豫期の發展に進みませぬから、天下の重寶として辱かしからぬ貴重品を圖製することには、迚も參りませんでしよう、けれども本會の經濟が、許す範圍に於て、價値ある貴品を圖製し、此名譽と紀念とを永く子孫に傳へまして、恥かしから

ぬものに致したいと苦心して居ります。

當然と偶然……會報の表彰

右の光榮を御ひまする優等賞者は、或は積年の辛苦茲に表るゝ人もありませふし、又偶然此の光榮を荷ふ人もありませふと思ひます、偶然のものは兎に角として、積年辛苦の結果此光榮を荷ひましたる人に對しては、本會は會員の榮譽を荷ふ人に對して其人の辛苦經營費を用ゆして、其人の辛苦經營費、并に桑園、蠶室、製絲場等の寫眞を得ゆして、師表とする者へ、之を會報に掲げ汎て世に紹介して居ります、左ればその人の苦心經營せられゆしたる効績も、殿下の御奬勵厚き御惠みに依りまして世に表はれ名實全きを得ることゝ信じます。

どふしたら實質の品評會が開ける

か、是は政策上の問題だが、蠶種や生絲に就ては差支ないとする、繭に就ては大に変究する必要がありはせまいか、現在の養蠶家は自分で乾燥して繭を賣るものは至つて少ない之が爲に乾繭を出品させようとしたら、オッコーがつて、出品者に取つて、今すぐに乾繭は不熟練の爲に、あたら繭を損じはせまいか、繭の出品に就ては、實質を品評する工夫を勉めねばならぬと思ふ、他の物でも勿論ならぬが、繭は殺蛹と乾繭との工程を經ねばならぬ、此工程が素人には容易ならぬ處である、之等を經て、昨年各地の品評會に臨んで親しく視察したが、支會の事情を異にする處があるから、方法等は異るとは、多くは

痛し痒し……一つの名案

出品者に對して、賞者に促すのに、印刷物を配付して注意するのはどうも効能が少い樣である、某支會では、蠶業の局に當る人、并に有志者、巡回の餘取又は、序の節、當業者、巡回の餘取の開催せらるゝ旨を說き出品を促し、盛んに評會を開催して、生繭を後に入れて最寄々々に集め、同一の方法の下に乾燥して、開催地の時期を待つたと云ふことである、之は現在に於て最も實質を品評するに近い方法であるし、又出品を得易い方法であるとも思ふ、養蠶家は繭の出産高りには一升や二升は何でも思はぬが、之を自分で乾燥するとなるとオッコーがる又全くオッコーのものであるが、撰つて袋に入れて持つて行きさへすれば好いのであるから、此邊の感情は除程吸呼ものであるが、此方法を取つた支會では、多數の出品を得られた、而して比較的完全に實質の審査を爲すに近かつた、之等は取つて範となること、信じます。

如何にして安息日を送らしむるか

余が靈絲業界に得んとする安息日は、甚だ有意味の安息日なる事は、前既に述べて置きましたが、第一に快感の内に過去を反省さするを方法を取らねばならぬ、之には集めるの手段を否集まるに心易くく集まれる樣にして貰ひたい、夫れには開會の日迄、汽車、汽船其他の交通機關へ交渉して待に割引して、優待を與へる樣にして欲しい、特に地には交渉して、球燈を吊るし國旗を樹て、參集者并に品評會に協賛を與ふる樣にして貰いたい、大和民族の喜び、平和の風に國旗の飜々たる光景を見なければ、其に陽暢たる快感或は湧いて來ない、先づ交通機關の優待に依り少からず滿足を得ゆ、所在地に入れば、國旗に涵ゆる、、徒に球燈に赤く、、偖此快感の眼に過去の

實蹟と比較對照の反應

を映ぜしむるである、即ち品評會場を見させるのである、如何に反映が寫るふと、如何に感覺しふと、兎に角見て貰つて置て、跡で講話を繞く限りでないが、此の講話は實際審査に當つた人に、比較批評をして貰ふことは實際有益であり、且則切である、繊別した人にも、實ふことは實際有益であり、且則切である、繊別した人にも、實ふ感つた人に對してもだ、而して今後向ふべき針路を開き、其他知名の士の講話實驗談等を總て事は、自己の實蹟を比較對照して聞くのであるから、何より印象し易いし、又記憶し易い、之が進化に資し向上を助け、國家と共に止まない活動の油ではありませんか。

今の時代では餘義ない

現在の程度では、此比較研究并に比較研究に對する講評が事業を經營する上に於て必要であることが、一般に認られ居らない、居らないからと云ふて、機會がなければ、何時迄も導くことが出來ませんから、多くの間に手引をする樣の手段を取りて、知らず〳〵の間に手引をせねばなりません、其手段としては、餘興も宜しい、神社佛閣實物の無料拜觀も宜しい、尚又靈絲業に關係ある商、店に對しては特に開期中割引して物品を安く賣ると云ふ方法も宜しいが、斯くしたならば、一方に快樂を與へつゝ一方では手引して向上せしむることが出き、他面には經濟的に品物も賣へる樣になりますから、喜んで集りまして、多く見る、多く聞くことが出來ます、乍併餘興なども宜しいから云ふて、

從來の樣な御祭騷ぎになつては困る

御祭敬も煥發せられましたし、農商務大臣も調査を要して之等の注意を促がされました事も御慶いすから、本會でも其心で居りますから何卒開催の當局者に於て成るべく浮華に流れん樣に注意して頂きたい、元より衆と共に樂み、衆と共に

向上の進路に向ふ樣にするのでありますから、餘興は決して邪くはありませんが、奢侈淫逸に流れ易い樣心掛くるは肝要であります。

安息日の效果と實例

右は安息日の意義及方法等に就て、概略を述べたに過きませんが、其効果に就ては、實踐の上に鑑みさせ、將來に同一の手段、同一の勞力を以てしても、現在よりは、より多くの生産を擧げさせると同時に、人心を感化して向上せしむるに在るのです、即ち職業を休みまして體力の休養を致しますと同時に、目に依りて達すべき彼岸の面影を觀さしめ、自己の現在を省みまして其路程を悟らせます、悟つた路程を如何して早く行き着くことが出來るかに就て、耳より聞きさせます、即職業に對する決心を促し其方法を解き明します、人は最安は必要でありまして、將來に對し愛する光明が見えますれば之が最大の慰安となりまして、過去の勞苦を忘れます、其他に優遇を與へて感奮し、一方には眞樂を與へて奬勵し、而して慰安の充分ならんことを期待いたします、斯くいたしましたならば、蠶絲業の發展の資源を養ふことが出來、日々に咲くことは疑ありません、開墾に依り農業者の安息日がありまして、此の日は農業者の全部が休業いたします、而して其日は學者並に實驗家の經驗談等があります、農業者に學理を應用しますることの一撞撞して居るのは、世界中で獨逸が一番であるそうです、而して同國では學理の應用が盛になつてから、同一面積の地面から、二倍の收入がある樣になつたそうです、之等は此の安息日の効果とは、各支に分れて、早く此の安息日を定むる樣の經營を建てゝ、蠶絲業の改良と發展とを計りたいと思ふのであります、斯くいたしましたならば客年下しました酒の墨汁にも叶ひ、蠶業を御奬勵に遊さるゝ、敢て蠶絲業者諸君に訴へまして其發を大くし之を現實する日の早からんことを願ひます。

蠶翅の發達に就て

農商務省蠶業講習所技手　高橋伊勇次郎

蠶の生理とか病理とか又は解剖とか其他蠶に關する學問は頗る精密に研究せられてあるが、蠶の發生に關しましてはドーしたものか決定せられてはいない、ことがまだ〳〵澤山に殘つて居る、殊に後の發生に關するものの即ち蠶の變態に於ける發育の發達に就ては多く研究せられず爲めに判明せないことが多いやうである、之れ諸學者が氣づかぬ爲めではあるまいか、他に研究すべきことが多いので之を後にしたのか、それとも研究が困難で種々なる設備と長年月を要するから、それ合して居るのであらうか何れにしても此趣味ある學問を不明に葬つて置くは實に遺憾のことである。

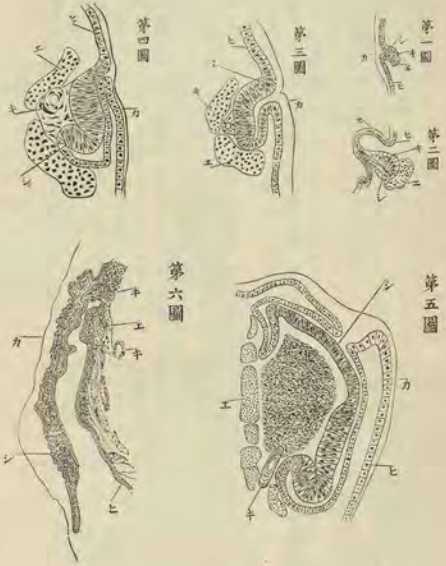
そこで私は此發生に關することを調べやうと思ふて去三十八年から三十九年に亘り先づ蠶の翅の發達に就て研究をなしたのである、見蟲の翅に就ては大分古くから調べられ「ツイヴァン」、「デクイチー」、「ゴニン」、「マイエル」、「マーサート」等の諸學者は種々なる見蟲に就て研究せられたが蠶の翅に就ては西暦千六百八十七年に「マルピギー」氏は成熟したる蠶兒に於て之が起原あるを發見し、後ち「ベルソン」氏は之が發達に就て研究せられ、西暦千八百九十年の「バドワ」氏は第四卷に記載してある、私が研究した成蹟は東京蠶業講習所報告第四卷に記載して會員諸君の一讀を仰ぐことに昨日四十一年の東京蠶業講習所報告第三十四號に載せてあるが、茲に又其大要を記載して會員諸君の一讀を仰ぐことに致した。

翅は蛹の時に初めて出來る樣に思はるゝが

精しく調べて見ると、それより餘程前蠶兒の發生する三四日前の胚子の體内に於て既に翅となるべき芽がある、此翅芽は胚子の時代にありては只皮下組織の僅かに厚くなつたに過ぎぬものであるけれども、蠶となつて成熟の内方に小さな突起となりて陷入するのである、而して其位置は第二第三環節の中央に於て能環節なれば氣門のあるべき部分の内方に存在する四五箇の蠶兒を解剖して此部分を檢するときは縱走氣管の少しく外方に偏して脂肪組織や筋肉などの下に當り、隙孔をなし皮膚に接近して横つてある、蠶兒の第二第三環節に於て氣門を欠いて居るはつまり此翅芽があるからであろうと思ふ。そして

翅芽の形狀は蠶齡によつて一樣でない

即ち蛹蠶のものは少さな環狀をなすけれども、蠶齡の進むに從つて其形は大となり、四齡以後になると、稍扁平狀をなしまして、熟蠶のものは益々大さを增し、且つ皿狀をなすに至るのである、試みに各齡の蠶兒を横斷して翅芽の存する第二第三環節を鏡檢するときは明かに之が形狀と組織とを見ることが出來る。翅芽は胚子の時代にありては極めて簡單なる皮下組織が體内に至るときは厚くなりたる皮下組織が體内



第一圖乃至第六圖
翅芽發達の順序

第一圖　蟻蠶の翅芽横斷圖
第二圖　二齡起蟻翅芽横斷圖
第三圖　三齡起蟻翅芽横斷圖
第四圖　四齡起蟻翅芽横斷圖
第五圖　五齡起蟻翅芽横斷圖
第六圖　上蔟四日蟻兒の翅芽横斷圖

（シ）翅芽
（エ）胚細胞
（キ）氣管
（カ）外皮
（ヒ）皮下組織

に陷入し、第一圖に示す樣なものとなり、後蟻兒が（成長し第二齡第三齡となるときは體の成長に從つて翅芽も益々大となり、體内に深く陷入し、第二圖第三圖に示す樣なものとなる第四齡に至れば翅芽は大さを增すばかりでなく、其成長は外方に向ひ、第四圖の如くなり、細胞は其數を增し、層が厚くなる、そして蟻兒が五齡になると第五圖の如く益大となり後充分成長したる頃は翅芽は大に發育して面積を擴げ、且つ兩層の細胞は合して一葉となる、此時に至ると、之が細胞は益々增殖し、且結締組織を生ずる。これを結締組織皮下細胞と云ひます、又處々には後に發達して翅脈となるべき孔が現はる、次で蟻兒が老熟し結繭を始めてより蛹となるまでの間に、翅芽は極めて速かなる發達をなすものであつて、上蔟四五日頃になると稍翅の形をなしたるものとなり、第六圖の如く皮下組織と「キチン」の外皮との間に鱗出するけれども、蟻兒が脫皮して蛹となるでなければ之を外部より見ることは出來ぬ。

翅芽には胚細胞（第一圖乃至第六圖）

と稱する細胞の一群が附着してあるこの細胞群は初めて鏡檢するときは、往々にして脂肪組織と誤らるゝ、又翅芽には其前後から氣管が分れて來て分布してある、五齡頃になると此氣管より數多の小氣管が分出し、糸の縺れた樣な狀態をなして翅芽内に這入り、其内の主なるものは後に至りて翅脈の主氣管となるのである。

蟻兒が脫皮して蛹となると

以前に外皮内に潛んであつた翅は漸く外部より見ることが出來る樣になる、蛹の翅は體軀に添ふて密着し、左右一枚づゝの樣に見えるけれども、之を取り離して檢査すれば二枚づゝあつて、前翅後翅共に蛾の翅に似て居る、けれども化蛹して間もないものは厚く柔かで鱗毛もなく、又翅脈なども不完全である、後時日を經て上蔟十日目頃になると大に發達し、面積が廣くなり、表面には「キチン」の外皮が分泌せられ且つ皮下組織は提絲狀をなしたる幼き鱗毛を生ずる、それより後ち日を經るに從つて翅の面積は益々擴がり、鱗毛は扁平となりて翅の全面を被ひ、翅脈は形くられ、略蛾の翅に近いものとなるけれども、其だ狹い容積の處にありて發達しつゝあるものであるから、襞をなして疊まつて在る。

蛹が脫皮して蛾となる

と其翅は初めは小形で貧弱かであるが、後次第に伸長して面積を擴げ且つ薄くなり、翅脈は完全に形成せられ、表面の「キチン」は固くなり、鱗毛を以て被はるに至るものである。

翅がかやうに充分發達する

と第七圖に示す樣に翅脈は屋骨上に分布し前翅は不正三角形で後翅は稍半圓形のものとなる、そして此翅脈は前翅と後翅とによりて多少分布の狀態異なるけれども、其主なるものは前緣脈、亞前緣脈、半徑脈、中央脈、肘脈、及内緣脈の六脈である此等の翅脈は翅を形成する兩層の細胞層が離れて、氣管をなしたものて、其内には氣管や神經などが横はり又血液が通ふて

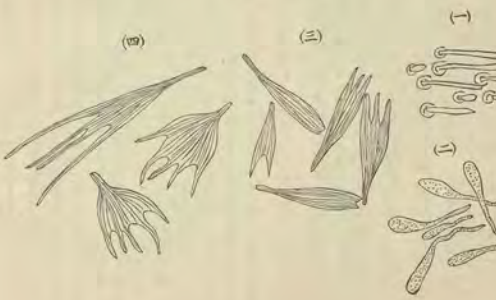
蠶種の發達に就て

居る。終りに

掌七圖　蛾ノ翅

第八圖　鱗毛發達の順序

(一)發生當時の鱗毛
(二)X發生後二三日を經たる鱗毛
(三)X發生後四五日を經たる鱗毛
(四)蛾の鱗毛



第八圖

源濁りて末の清からう筈はない、而かも世人の多くは絲質改良の根本たる蠶種の改良といふことを忘れて居らはせぬか、蠶種改良の聲大なるものあるに拘らず割合に其事蹟のあがつて居らぬのは(或は道般の消息を洩らして居るものではあるまいか、先づ吾々が蠶種の上に於て最も忌はしく思ふのは。

同種異名と同名異種の問題である

同じい種類であつて其名の違つて居るものも尠くなければ種類が違つて名前の同じいものもが其多いのである。今此實例を擧げてみれば伊達錦といふ種類に新任又といふ名稱もあれば又昔といふ名稱もあり白羽などといふ名稱もある、金華山といふ飛白種には所に依て類城なんといふ意氣な名前が付いて居り、又筋子なんといふ郎めいた名前も付いて居るソーかと思へば大和錦などといふ詩人にあらぬ吾々に迄何とかコヂ付けたいと思はしむるやうな名前もツイて居る、瀚賞も同じく絲賞も同じく全く同一の種類であり乍ら、姥は何と名は何々、字は何々、號は何々といふやうにチコヘンな名前を澤山持たぬでもよさそうなものだ、イヤー蠶種、其物が自然に持つたのぢやない、持たしたのだ、蠶種家が持たしたのだ何故に持たした、己が販路を擴張したいといふ野心の爲に持たした者だ、吾々蠶心に驚らるゝために持たしたのだ、アイツと同じい名稱の蠶種では賣が悪るかろう、買はぬであらう、先づコンナ名前でもくつつけたならば得意場の競爭には負けぬであらう位な徹頭徹尾利己的の考へから珍奇な名前をつける者もあれば、人のつけた名前の下に蠶種を賣るのも男

鱗毛の發達に就て

少し進べよう、鱗毛は上簇後十日目頃になつて初めて蛹の面に生ずる者である、そして其發生當時は毛狀をなしたものであるが、後ち日を經るに從つて次第に變形し、先端の方が廣くなり、鎧狀のものとなり、上簇十四五日目になると扁平となり、先端は二三に割れ、表面には縱の線が出來、稍〻固く有の形狀を現はし始め其後次第に發達して蛾となり初めて完全の鱗毛となるものである、(第八圖參照)そして其色は本邦種普通の蛾のものは多くは、灰白色であるけれども、黑羽青白とか佛國「アーレイ」などの樣に彩色ある蛾の鱗毛は種々の色を有するものである。

右は余が研究の大體を述べたに過ぎぬ、生來筆が廻らぬのに大に簡約して書いた爲め充分盡せぬ點もあつたろうから詳しいことは蠶事報告を一讀して貰ひたいのである。

困つた問題は同種異名と同名異種

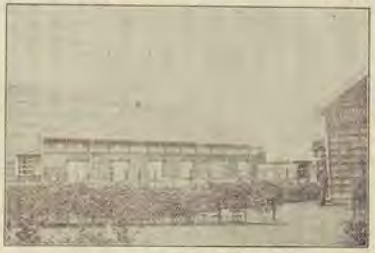
本會評議員
評議員蠶會幹事長　角田喜右作

今我蠶業界に於て吾々の大に注意を拂はねばならぬ問題は蠶種である、何となれば蠶種の良と惡るいとは其繭質に影響を及ぼし隨て絲價の上にも大なる關係を及ぼすからである、

振りが憐るい、何か新らしい名稱をつけて何々籠館の何種といはるゝものも名譽である、若しも幸に何種は何某の發見せるものなりとして書いて買へば、夫れこそ未代まで名が殘る位の嬉しい名譽心に驅られて樣々の名稱をくゞつける者もある、自己本位の徒の爲すこと多くは曾此類であつて何も怪しむことはないが。

最も神聖である可き我蠶種業者に

比較的此徒の多くして爲に斯業進歩の上に尠からざる障害を與へん歷史は何んとしても抹殺し得ざるを吾輩は深く悲む者である、又我群馬縣のみに就て調べて見ても同じ又昔とか青熟とかいふ一名稱の下に繭形の大なるものあり小なるものあり長きものあり短きものあり其形狀の不同なること殆ど名狀すべからずである、勿論飼育法の相違や氣候の關係に依て必らずしも同質の品のみが出來やうとも思はぬが、併し同一名稱の中に全然其性質の異なる青熟もあれば赤熟もあり小石丸もあるといふに至ては其兼殺さ加減が推し量られるではないか、强て種類を統一せんとして斯う亂暴にされては實に製絲家が困る計りでなく、其出來た生絲に纖度細太の均一を缺くから及ぼす影響は頗る大きい、種類一定でムシ美名に醉ふて前後の分別もなく無我夢中に進つた結果、鳥網の中へ足を入れたやうな不手際をして與れた者がソンジョ其邊にまごついて居りはせぬか、之を要するに同種異名異種同名といふ弊害の存する爲に。



東京蠶業講習所製絲場一部の景

蠶種業界は丸で混沌たる狀態である

故に之が解決は實に火急の大問題であるといはねばならぬ、我群馬縣の有志茲に見る處ありて去る群馬縣蠶種業組合聯合會を以て種類調査を爲さしめたのであるが、其調査の結果に依ると二三年前迄は二百三十餘の種類が有つたものであるを段々調査して名實相當のもののみを飼育せしむるやうにした處が三十餘種に減じて仕舞つたのである、勿論斯く統一しても全然其性質の異なる者を一つにした譯ではないから、繭質も絲質も皆一定にすることが出來るのである、尤も統一した斗りで捨て置けば再び雜駁に流るゝ恐れがあるから、原々種を拵さへて年々蠶種家に之を飼育せしむる方針である。

今其原蠶種配布に關する要項及經費を擧ぐれば左の如くである。

一、目的群馬縣蠶種組合聯合會は繭質の一定を期せむ爲め一化性及二化性の原蠶種を組合員に配布す

二、原蠶種の數量は縣下製造者の需之原種二千萬蟻と見做し之に對する一割二分即ち二萬蟻内外とす

三、原蠶種に使用する蠶兒飼育者は組合員中より評議員會に於て推選し會長之を囑託す

四、囑託すべき原蠶飼育者は一人に付原蠶種五百蟻宛を配布し蟻數二十名を飼育せしむ

五、囑託したる飼育者には原種を無代にて配布す

六、飼育其他に要する經費は總て受託者の負擔とす

七、受託せる原蠶種は本會傳染病豫防委員會の審査に合格したるものを購入す

八、購入原繭は組合員中評議員會の推選し會長之を囑託す

九、專任技術者を置き飼育其他の事項を監督せしむ

原蠶種購入費並支出總額

一、金壹千六百七拾五圓	原蠶飼育用原種五千蟻購入費 但一蟻に付金壹錢 既成原蠶種十萬蟻購入費但同前 原蠶種配布費 雇常員八人日當金貳錢宛延百日分 同上旅費三百里分一里十五錢宛 專任技術者一人月俸壹拾圓宛五ヶ月分
	收入總額
	支出總額

内訳

金百五拾圓	原蠶種製造に關する要項及經費は右の如くであるが、次に原蠶種依託製造手續を擧ぐれば左の如くである。 一、原蠶種製造に關する種類の調査飼育の管理は各郡組合長に之を依囑す 二、各郡組合長は縣の原種に倣すべき蠶の種類、掃立、蟻量、原蠶飼育及蠶種製造責任者並に製造原種の推定枚數を定め毎年四月二十日迄に本會へ報告すること 三、原蠶種製造の依託を受けたる責任者に各郡組合長の指揮命令に從ひ蠶種別中充分の注意を加へて其任に當るべきこと 四、各郡組合長は時々責任者の蠶兒を巡視し掃立期日蔟起の狀態、上蔟試驗、發蟻の期日等を本會へ報告すること 五、原蠶飼育責任者は繭の選擇を行ひ原繭となるべき數量を各郡組合長を經て本會へ報告すること 六、原蠶飼育責任者に本會より原證する檢査員の檢査を拒むこと能はざるは勿論原繭後の檢査に依り不合格となる異類を唱ふることを得ず
金壹千百拾五圓	原蠶種十萬蟻配布一蟻に付金貳錢
内訳	
金壹千圓	
收支差引	
金壹千六百七拾五圓	不足

演壇

蠶絲業と日本國民の經濟

法學博士　松崎藏之助

綿と生絲と日本國民の經濟

此綿絲の事をお話するに就きましては必ず諸君も、綿の輸入と云ふ事を第一にお考になられましせう、昔は大紙吞々日本國民の衣類は生絲かあるは本綿絲で作つたものを用ゐて居つた。それも而も日本の國民が作り出したものであつて、外からは持つて參らせぬのであつて、此内生絲の方は非常に發達を致しまして、即ち蠶の生産額は當時、一年々々と、增加致して參りましたが、之に反して綿の方は、段々と廢れて參りました、綿の生産は只今では少し位殘つて居る地方もありますけれども是は殆ど言ふに足らない、一方は增し、一方は減つて、其增減相反して居るけれども、現今尙日本の國民經濟上此二つのものが大關係を持つて居ると云ふのは誠に面白い事ではございますまいか、そして綿は年々出來なくなります其代りに之をば米印度産米利加の三ヶ國から輸入致しまして、其輸入額は幾千と見なすると實に驚くべき程であります、明治四十年即ち昨年の統計に依つて見ますと、絲を見ると原料品の輸入として是は大藏省の統計に依つて見たのですが、一億四千四百四十九萬圓餘であります、生絲で一億二千三百萬圓餘をば輸出しまするに拘らず今度は木綿の方で一億四千四百四十九萬圓輸入致します。

二千萬圓を生絲に添へて綿と交換

さうすると同じ絲ですから差引致しますと此絲上餘程面白うございますね、比較して見ますると、二千萬圓程絲で釣を取られますデ如何にも蠶絲業の進歩は慥に喜べきことであります、併し一方に於て絲の爲に二千萬圓の釣を取られまする、レテ見ますると是から先き、此釣を何生絲で製致さなければなるまいと思ひます、此點から見ますると減に致さなければなるまいと思ひます、此點から見ますると減に有がたい仕合せとは言へませぬが、尙遺して細かに考へて見ますると、聊か以て慰むるに足る點がございます。

此絲及び原料品の輸入が一億四千四百五十九萬圓と云つたが無論是は綿だけではございません、綿が此中で約を一億圓内外だらうと思ひます、其外は或はやはり山繭——所謂柞蠶のやうなものもございませう。又綿絲、綿織いのて上等品などもありませうからそれは除いて。

純粹の綿は一億圓内外

と致しますが、實ては是を輸入せずに濟みました者である、其當時に無論毛唐人の着て居ります斯んなもの（着用の洋服を指す）はない、それから又當時は日本人の着ました衣類は生絲よりは寄なり本の絲の方が多うございましたが、即ち昔と今とを比べましたならば、木綿の着物を着る者が絹の着物を着る者よりも以前は多かつたらうと思ひます。さうすると斯う云ふ事が淫びます、其やうに木綿を以て着る者が多かつたならば當時の木綿の生産額は如何にも多かつたものだらう、今は洋服を着る者も殖えました、それから絹の着物を着る者も殖えました、それにも拘らず綿の輸入が非常であると云ふ事であつたならば當時の木綿の生産額は餘程でなければならぬ筈であります、然るにて其の頃は決して近頃程の輸入額の生産は出來ませんなんだ、是れは大に思ひべき點である。

廣島絹織株式會社大梅澤村近邊桑原溜中繭倉

日本人の木綿服はたつた一千萬圓

綿として輸入しますのは一億圓と致しましても是は綿絲紡績絲となつて、さうして支那朝鮮等に輸出されます、單り綿絲としてのみならず或は布類、或は衣類と致して精製されました工業品も輸入されます、それで私は一寸調べて參りましたが、綿絲紡織絲として輸出されます金額が、昨年は三千五百三十萬圓餘に上つて居ります、昨年は少し下りまして三千二百萬圓餘でございます、さうすると一億の中から此三千五百萬圓を引きますと六千五百萬圓である、此外に布帛類として六千二百六十萬圓程輸出されて居ます、それから衣類として一千一百十八萬圓程輸出されて居ますから、差引勘定して見ますると綿絲として輸出が三千五百萬圓程あります、此の外布帛類の輸出が彼れ此れ六千萬圓位あるかも知れませぬ、是れは精密に調べて諸君にお話すれば出來ますことてありますが、さうするとやはり九千萬圓程は、此木綿類が日本からして外國に輸出されます、即ち一億の綿をば持つて來ましてさうして其綿をば紡績絲と致しまして、吾多數の國民の衣服を作る原料として服つて置て、さうして其外にまだ約そ九千萬圓程外國に輸出致しますから、殘ります所は唯一千萬圓位しかないのです、如何でせう、一億の綿を持つて來て、さうして多數の國民の衣服を拵

之を輸入に頼べますれば僅か一千萬圓位の差のみであります、是は誠にどうも結構な事であります。

切支丹か手品か

昔は切支丹の術があつたと云ふ事ですが、當て日本で綿をば態々作つたが今度は作らぬても宜いやうになつて、さうして自分に作つた時よりは深山な綿を使ひをして、尚今度は持つて來た位の綿をば持出すのでありますから、是は切支丹バテレンの術かも知れませぬ、切支丹バテレンの術は誠に結構な事で是はやはり日本の國民經濟の維持或は發展につきまして第三番目に大關係のあります、職業又は事業と思はれます、此點に就て私は非常に感じた事がありますのは外ではありませぬが、或は此御列席の方々の中には、私よりも好く御承知かも知れませぬが。

昔しは一人前五十目宛……今は五百目の衣物

昔は外國から綿を持つて來ませぬ時――持つて來ませんでさうして、吾々の衣類は木綿で作りました時代は凡そ一年一人宛五十目宛でありました、所が今は吾々一人アヂどの位の綿を年々消費しまするかと云ふと、其十倍即ち五百目位をば使ひますさうです、茲に於て切支丹バテレンの術は益々巧妙に願はれて來ました、昔は僅か五十目しか使はないものが、今は五百目を使ふ、さうして尚九千萬圓程の輸出を致すと云ふ事ですが、それに就て尚面白い事があります。

五十目の時代はどんな衣物を着たか

其五十目をば使つた時代には吾々の多數國民はどのやうな布帛類を用ゐたのでせう、如何ですか今の世の中で如何にも總ての人が――國民がサツパリした小綺麗な新らしい著物などを著ることは殆んど違ひありませぬが、元は僅か一人前一年に五十目の綿を使つたのが今では五百目を用ゐます、どうも其差は非常なものであります、實に非常と言はなければならぬ、デ此五十目の時代は或はまだ／／經濟の發達の程度が現今の如くでありませぬからして、如何にも粗末なものを用ゐたかも知れませぬけれども、其粗末と云ふ事に就ても、多少意味があらうと思ひます。

五百目の綿は果して有効的に用ゐらるゝか

近頃五百目の綿をば一人前に使ひます、此五百目の綿を最も有効に又最も有利的に果して使つて居るでせうか、如何でせう、此點には日本の國民の經濟のみならず商業、工業の技術、それから國民の風紀、又は道德にも關係あります事でありますと、云ふのは總ての木綿類にして當國地方で出來ます木綿織物などはさうでもありませぬが、桐生足利邊――さう言つた所が決して郷口を言ふのぢやありません、其外です極々新意匠を凝して當はと進歩的な織物工業の行はれる地方の生產品を見ますると、見ましたる所では誠に結構で

ある始めて見れば單衣のやうなものに變しても又手拭のやうなものにしても、眼く所に依りますと云ふと、日本の手拭は非常に面白い意匠を以て出來て居る、デ亞米利加邊ではあれをば、ズツと部屋へ下ませてソーして、部屋の飾りにして居ります者があると云ふ事です、所が此方では誠にたくつて顏を拭いたり或は手を拭いたりする、其位立派に出來て居る手拭を一遍揉みたくつて顏を拭けば――今日などは宜しうございますが夏汗が出る時一度拭くと何だかグダ／／になつて後は見るかげもないやうな物になつて仕舞ふ、單衣などもソーです出來たては誠に品が宜しうございますけれども、若し汗でも搖いて一遍洗ふとグタ／／になつてどうも使ひ物にならぬと云ふやうな物もある、

技術の點から見れば誠に立派

であるからそらい進歩したと云ふはなければならぬが、併し之に反して持ちの點から見たら如何でせう、手拭にしても、單衣にしても、其他のものにしても、昔の樣に或は二年三年或は四年五年を經ましても、御用ゐるに足る織物などゝ云ふものは、極く少なうございます、デ昔の物になりますと云ふと、二年や三年どころではなくて、先ず傳來の織物――著物も隨分ないては無いでせう、或は諸君の中にお持ちの方もあるかも知れませぬ、ございますから、昔の事を考へますと云ふと著物をば、さう澤山毎年作ると云ふことは、ソー普通の人の頭には浮びませぬ、所が近頃では如何でせう、世の中の風潮とは言ひながら、冬が來れば新らしい著物を二枚も三枚も作る、それから夏が來れば浴衣を五枚も十枚も作る、枚位作る人は幾らもある、中には深山作つて一遍か二遍著れば藏の簞笥の中に藏め置くと云ふ譯である、是等は或は世の中の風潮かも知ませぬけれども、實に啻らなく富をば用ゐると言はなければならぬ、即ち木綿をば最も有効的に消費するのでなく、有利的に消費するのでなく、郷く言へば折角の富をば無茶苦茶にするのである。

一年に手拭二筋

當て年寄から聞いた事がありますが、其前には手拭に致しま

した所が大抵一年に一筋か二筋位のものである。使ひまする
のが、正月の元旦に一筋の手拭を下ろしますれば、それを少く
とも半年は用ゐる、多く使ひます者が盆になりまして一筋の
手拭を下ろします、それでもナニ揉みたくつた所がダメ〳〵
にはならない、ゾロリとしてゐて透徹つて仕舞ふと云ふやな
ことは無かつたのであるさうです、是は決して昔を夢めまし
て今を忘れて悪くふのではありませぬ、昔を上げて今を忘れて下な
す譯ではありませぬ、最前申しました通り織物の技術の點か
ら言へば進んで居ります、併し持つと云ふ點から言ふとド
も感なきを憾ぬのであるし、して見ると尋て一人前五十
目で済みましたものが今では五百目要ると云ふ事になるのも
或は此持つと云ふ點から來るかも知れませぬ、諸君は決して
此綿絲業に從事されるのでないのでありますから、是を以て
諸君にお詫りするのではありませぬが、技術の點から見ました
ならば、又單に見るばかりではない、日本の一般の經濟上
又物をば貯へ物をば維持し保つと云ふは、謂はゞ此經濟道德
であります、此點から見ると單に是は木綿の織物業に止まらな
いのであります、若し此點に注意しましたならば、尙今まで
の生産しまする物をば有効的に尙有利的に製造して而して之
を用ゐますことが出來はせぬかと考へられるのです、デ單り
木綿の織物業のみでなくして、之をば他の生産業、又蠶業の
上にも微して見たいのであります。（未完）

吾社は如何にして製品を統一するか

特別會員
下仁田社社長　佐藤量平

組から來た絲は先づどーするか

と云ふと組からまいりました箱のまゝ假受付をいたしまして、組から添てよこします「デニール」を「デニール」檢査係へ廻しまして木數を調べ而して此の、「デニール」が組の秤定と秤合するやを秤檢いたします、そこで又組からよこします絲には臺帳寫と申して送狀的のものがあります、之には其絲の「デニール」が記入してあります、併しこの「デニール」が本社の定めたる「デニール」の範圍内にあるや否やを調べまして範圍内にあるものは絲の等級檢査場へ廻します、若し此範圍を踏外づしました「デニール」のある時は其絲は組へ返却いたします、此組から來る一箱と云ふのは生絲百二十連

即ち二百四十本入つて居るのです。

檢査場ではどーするか

と云へますと先づ秤量といひまして來た絲を一連宛秤量して見まして其目方が組の秤量と違つて居るや否やを見ます違つてゐる者はそこで目付を改めます、目付の出來たものは順次檢査に付するもので檢査人は斯道熟練家を以て之れに充て居りまして、色澤、纖維、味、類節、等を見ます、勿論檢査人の前には標準絲がありまして對照に便してあります、茲に澤山の絲の等級が極まるので其極つた絲を帳簿に記入しまして等級別に箱へ入れて捻造の力へ廻します、檢査室で一日ドノ位檢査をすることが出來るかと云ふと極日の長い時で一人千五百遍（三千本位出來ます、併し此檢査で餘り絲が不揃であると思ふと、其中の二三遍を再檢査室へ送りまして之を再檢査をさせます。

再檢査室

には檢査監督者が居りまして最初の檢査が適當であるや否やを檢査いたしまして之れを決定します。

新潟縣中頸城郡高田市古木古社重大海津下越撫郡大海津下越撫郡桑植樹

器械檢査室

では結節「デニール」の斷等を調査するので其成績によつて一々賞罰を決するので甚だしい粗惡な生絲を造つたものからは過怠金を徵收するのであります、併しこの絲の粗惡を發見したとしても既に受付から一旦檢査室へ廻つたものは之を組へ返戻することはありませんで普本社の負擔となるのであります、但し夫れが粗惡なら前申上げた通り過怠金を徵收するのであります、檢査室から

捻造へ廻つた絲

は工女が普之を捻るのですがどうもどの工女でも困つたことは上絲を捻りたがるのです、是は尤も其筈で絲が良と御承知の通絲に滑りがありますから同じ量目でもじつと重くて嵩張らず宜い具合に捻られるのですが、悪い絲になりますと、がさついて宜い具合に中を行かんのであります、それですから監督と云ふ者を置きまして、其捻り具合を調べさせ「どうもいは此絲を捻りなさい」おまいは絲を……と指定たせて居ります。

又或時は或工女は何等の絲……と云ふ風に決め樣ともした

事がありましたが、ソー高潮なく絲が出る譯のものでもありませずしますから、ソーしますと或る工女は仕事をして或る工女は遊ぶと云ふ結果になりますので、トウ〳〵今日の樣な遣り方にして居ります、工女の執業時間は日の長き六月は午前六時三十分より午後六時まで、又日の短き十二月は午前七時三十分より四時三十分まで、其間の七、八、九、十、十一月は日の長短に依り時間の伸縮をいたします、其内午前二十分、晝四十分午後二十分、都合一日に八十分の休みを與へて居ります、其間大抵十時間で平均一人一時間五十本内外捻ります。

工女の賃銀は普日給で之を十六等に分ちて置きます、一等工女は一日六十錢十六等工女が十五錢位で、其間は上五錢下三錢の開きがあるのです、十六等工女と云ふのは仕事も何もするのでないので、つまり見習でありまして、工女は左樣……大抵上地の者で普通よりよく働きます、只今工女は昔で六十二人居りますが、此外工男と云ふのが二十八人居ります、捻の潤んだ絲はすぐ括造室へ廻はされるのですが此

括造室ではどーするか

といへますと色澤の齊整を造らせるのであります、此時に檢査室で見誤だのを發見すると云ふ仕掛ですが、併し此處では只だ澤の色澤のみ齊一を發見するので類節とか、捻造の際の切斷などは中々發見出来ません、只今工女は昔で六十二人居りますが、此外工男と云ふのが二十八人居ります、捻の潤んだ絲はすぐ括造室へ廻はされるのですが此

括造の終つた絲

は今度商品標をはさみ包紙に包みまして、其十六括を一個として秤量（凡一個九十目位）の強製紙に入れて、絲箱に藏め横濱へ出すのであります、此強製紙は雨などは通じませんから安全です、さて此の絲箱はつまり通箱見たやうなもので、又横濱から戻つて來るのです、私の社ではかうして製品を統一して居りますが、大體に於て體成よりは實質と云ふことに重きを置いて居る積りです。

四拾一年蠶業界の回顧

農學得業士　門前弘多

四十年度の生絲四千五百梱といふ巨額の繰越を受けたる春の横濱市場は、景氣が兎角回復せぬ爲に、養蠶者の意氣込振はず、蠶種が除つて慨觀が暴落した、之を一四十年の活潑であつた、貿易市場及歐の豫約販賣を以て持立をした養蠶家に比べた時には實に雲泥の差ありといはねばなりませぬ、

半は贅澤品であつて、得意を外國に有つてる生絲の如きは外國市場の影響を受けて其一高一低一張一弛する狀況は眞に翹俏するとのできないものがある、我生絲の最大得意である米國市場に於て銀行會社の破産、重役の逃亡自殺等を續出し、大恐慌は引いて歐洲市場に及ぼした、我國にも歐く如き大打撃を及ぼした、其後米國の恐慌が去つて歐洲の金融赤黑調に復したけれども、横濱の空は依然として暗澹たるもの取引が捗しくない、春蠶は全區可なりの成績で終了したけれども、繭の價は廉く賣て養蠶家は悲嘆の聲も弱れず、續いて夏蠶秋蠶共に相當の成績を擧げたけれども、米國の大統領選擧戰の影響「ブライアン」と「タフト」の競爭戰は其國民をして熱狂せしめたから、生絲を顧みるの遑なからしめたであらう、四十年の蠶業界は かくて平凡不振の年として經過したのである。

新成大海澤村越橫野原蒲中縣長見瓜本丸刈中本見品
日年二樹桑

此平凡不振であつた年は「蠶書」通の力面に於て記憶すべきの年であつた、蠶絲業の各方面に渉りて甚だ多數の書籍は出版せられた、内記憶すべき大著として吾人の手にしたものは最近日本蠶病論」「蠶業大辭書」「世界の蠶業競爭」と日本蠶業等である、出でゝ夕を待たざる蜉蝣の命を短命として瀕々綴出する片々たる蠶業書は果して何の圖する所ぞ、吾人は此大著を出したる四十一年の蠶業界を觀ずせんとするものである。

最近日本蠶病論は菊判千五百頁の尨然たる大著であつて、其著者は大森博士が幾多の機會によつてなれる大著である、之を一目に於て已に他に四篇を見ない、其内容に至りては全蠶が嗽々の緒として蠶病に關する直接の基礎科學より蠶病一切の問題を網羅して洩らす所なく其概括的なる點に於て其原著的なる點に於て復他に四篇を見ない、蓋し蠶業學術技藝は日本が以て世界に誇り得る所以佛國「パストール」の蠶病論は久しく蠶病學の權威であつたが、此書は現代に於ける蠶病學の權威であるといはねばならぬ。

蠶業大辭書は加藤知正氏の編纂に係るもので、其名の示すが如く一大辭書であつて未だ第二分冊まで發行したるに過ぎないから鬼角の評はなし難いけれども、數年來辭書の流行は非常な勢で殆ど迎接に遑なき程であるけれども、蠶業の辭書は全く類例なきが故に、此書完成の晩には蠶業界を利する所大であらう。（編者曰く既に全部完成せ

るも親本間に合はず爲に配本の頗る相遲れしは多謝する處である）

世界の蠶業誌學士と日本蠶業は伊藤農學士の著で著者義に歐洲に留學中佛蘭西を研究し、歸來札幌農學校の學術報告として蠶業誌

特設せる事は、やがて來るべき五十年の大博覽會に於ける蠶業の中心地たる日本大博覽會を特設せなければならぬ事を暗示したものである、大日本蠶絲會の主張が實現せらるゝの日あることを疑はぬのである。

京都蠶業講習所が女子部を設けたる注目すべき事で、東京には早くより女子を收容して教育するは我邦の現狀に於て考慮すべき事であるから、講習所は女子教育蠶業試驗等をなすに至るであらう。

蠶業に關する論文は各種の雜誌に散見して居る、其内吾人の記憶に殘るものは外山博士の蠶業に關する論文である。

つたが、養蠶絲は女子の適業として丁年内外の男女を同所に收容して教育するは我邦に於て考慮すべき事であるから、講習所は女子教育蠶業試驗等をなすに至るであらう。

蠶業に關する論文は各種の雜誌に散見して居る、其内吾人の記憶に殘るものは外山博士の蠶業に關する論文である。

森博士は暗示を吾人に與へる事多い、大たる雪といふを發表せられ

たが、生絲檢査所の試驗により明舒絲量等の點に於て在來種に優越せる良種である、佐々木博士は蠶病に關する試驗を繼續せられ

つゝあつて、最に細菌との關係を論ぜられたが、近時蠶病

に關する發見研究は蠶業新報にも譯述せられたが病原を原生動物に歸し、傳染說を唱へたのは大森博士等に似て居る、膿病の說がある、早く根本的の解決を見ん事は蠶業界の希望する所である。

吾人の觀察する四十一年の蠶業界に於て吾人に印象を與へた事は大概上述の如しである、吾人の觀察が狹隘なるか、或は智識の淺薄なるかにより重要なる問題を逸したのもあるかも知れない。吾人は只其見たる儘を述べたのみである。

繭質の惡るくなつた原因

農學士　小林薫二

進歩しつゝある蠶業界に向かつて別つに喋々の述ぶべきこともありませぬが、併し近年著しく感じて居るのは一般に繭の質が惡るくなつたといふことである。技術は如何にも巧妙になつたが、餘り巧者になり過ぎて繭質に大なる惡影響を與へて來た。

技術が巧者で繭質が惡るくなつた

とは如何にも受け取り難い所しではあるけれど之は如何にも實際である慥かである、此程近之の養蠶家の實況が之を證明して居る、之は恐らく此程近手ではあるまい、若し之を遡ふ人あらば、繭の大敵たる本庄町に就て之を調ぶるが宜しい蓋し思半に過ぐる事があるであらう。

繭質の惡るくなつた原因

或人は夏秋蠶が近年盛に行はるゝ結果として桑の盜採を遣るからだやといつて居る、成程之も有力な原因であるから、が併し私は近頃の養蠶が餘り經濟的になり過ぎて所謂ひするやうになつたからだやといひたいのである。

イヅコの養蠶家も昔の樣に一ダース蠶は殺さぬ、昨日が昨日迄人に見らるゝやうな褒められるゝやうな美事な蠶であつたのが一夜明けての今朝の慘狀寧主は落膽唄は泣く……痴うして跳めて居ても仕方がないから、俄に請めて川へ流せといふ樣なことは モー今日此頃は殆ど無くなつたのである、之が所謂巧者になつた證據だやが、さて繭質はといへば見られたのではない、昔の樣に立派な繭はドコへ行つたであらう、共進會や、品評會の審査成績を見れば其絲尺の短くなつたこと只驚くの外はない、夫れも其等十二坪の蠶箔の中へ五餘蠶二千四五百頭も投り込んでウヨ〳〵さして桑を少し與へるから、絲尺の短くなつたのは當然である、さて桑を少し與へるから、絲尺の短くなつたのは當

世の厚倒ひ論者

は養蠶經濟中最も重要な部分を占めて居るのは、桑代と人

聖旨に感泣す

本會編輯主任　加藤知正

余義に自ら勝らず蠶業大辯書の編纂を全てし項者全く成る、成るに及て長くも天覺の光榮を拝み、感泣止ることを知らざるなり、乃ち聖旨の編纂の顛末を叙して聖旨の深きを傳へんとす。

編纂の動機

蠶絲業は今更私から申上げる迄もなく日本の主たる產業であります、此日本の重要產業たる蠶絲業は年々一年一年當局及當業者の努力によりまして改良されられ品質は優良となり產額は增加して來るといよ〳〵次第で誠に喜ばしいことであります、さて靜に考へて見ますに、まだ〳〵改良發達を計らねばならぬことが澤山にありますから、之を閒然たらしめぬ樣にしてこそ始めて日本の蠶絲業も立派なものになるのであります、併し之は到底一朝一夕に行はるることではありませんはモー少し蠶絲家に關する智識の普及を圖らねばならぬと思ふのであります、從來蠶業敎育の機關としては東西兩蠶業講習所及甲、乙兩種の蠶業學校（他農學校）で公私立佛習所及講習所があるとか夫れ其他つて居りますけれども何分にも之等特別の蠶業敎育機關には其數に限があるので、到底全國幾多の就學希望者を悉く收容する譯には參りません、といふて今後に學校を增設するといふ樣なことは到底色々の事情が許さぬことであります、止むを得ずんば現在の儘にて自然進道の結果を待つより外はないといふことに歸着するのでありますが、さりとは餘りに情けない話である、何とか良い工夫がありさうなものの……と考へて居る最中不圖社會事林を手にしたので、成程辭書は學者究明の果を蒐めたものであつて面かも短時間の閒に最も廣く智識を社會に授ける唯一の學校であると思ひましたが始りて、トウ〳〵蠶業大辯書の編纂を企だつるやうになつたのであります。

編纂の經過

編纂の思立は丁度明治三十七年鄕里に職を奉じて居た頃でありました、之れからといふものは眼さへあれば蠶業に關する書を繙く、土地の故老に質すといつた樣な工合に進へず意を用ひて居りましたが、何分田舍の事ではあり旁々思ふ樣に參りませんでした、トコロが其後本誌に筆を執る樣になりましたので本會理事、吉池慶正氏や知人の文學士伊藤成治氏及び其の他の人々などに相談しました所ろ非常に賛成せられ郷蠶業講習所長故松永伍作氏、生糸檢査所長藤原章の三先生に監修をお願するとしまして書肆勤業書院に出版の話をすると院主玉澤喜一郎氏は非常に喜んで快く其出版を引受けて與へました、之れからといふものは眼さへあれば蠶業に關したから萬事大變都合よく運び、公私編纂に着手したのであります、併し之から非常の難事であつたとは、第一が經濟難、第二が原稿整理難、第三が校正難でして出版の期日に餘裕がないといふのであるから夫れは〳〵非常な苦しみで、朝は早くから夜は遲くく寢に就ては又眠られぬといふ有樣で遂に神經衰弱症に陷つたのであります、それでも漸く完成するに至りましたが、今日から過去を顧ると實に寒心する樣なことばかりでありました、殊に勤業書院の如きは最初の豫約よりも約七百圓も紙面が增加したので經濟上に非常な打撃を受けることになりましたが夫れも拘らず國家の爲め、斯業の爲め終始一貫專心一意本書の出版に盡瘁したばかりでなく、豫約者より實費不足金を追徵したらどうか夫れが當り前ではないかといふ樣な注意を他の人々からも受けましたが併し考へてみればこれは當方が悪いので豫約者の知つたことはせねといい、假令何程の損をしたからとてもそのなことはせねといつて、トウ〳〵追徵金も取らずに豫約價以上の實費のかゝつてゐる本を其儘送附したことなどは此種の人としては殆ども稀に見るところの美擧であらうと思ふのであります。

無上の光榮

熱誠なる各位の御指導によつて漸く本は完成しましたが、製本に十分念を入れて居ります上年末年始にかゝつたので、ドーも製本が間に合はぬといふ有樣でありまして、乍併茲に

長野縣北安曇郡鹿島鈴山風穴蠶種貯藏所

尤も喜ばしき恐れ多くも客歳中本書を天皇、皇后両陛下、皇太子殿下、皇太子妃両殿下へ奉上致しましたることに及び、小にしては養蠶家の經濟を支配しては國家の消長に關する所以であるから、此の品種の撰擇改良は實に要務中の急務であるのであります。

品種改良と卵形又昔

農商務省蠶業試驗場技手　水野辰五郎

品種の改良撰擇

口に筆に喋々喃々、其急を傳ふることは久しいけれども此事たる元より困難なることで、正確なる定見と確實なる方針並に精練なる手腕とを具備し、且つ五六の星霜を重ねるも、尚其目的を達し得ざるやの否やを得ぬ程とであるから從つて其歴の大なるに不拘、初踏躇々として暴がらざるも亦た故なきにあらずである、偶々理想の改良種を掛たりとなすものありとも、其の多くは一是あるの所一非之れに伴ふ人の常の端足し得べき良種は、實に曉天の星も啻ならざる所なき其に者ある、今や蠶業は國是となり、是れが盛衰は國家の消長に至大なる關係を有すてふ、重要なる國産の地位を占めて居るのて、

一繰の絲能く蜻蜓洲の命脉を繋ぐ

てふ言葉は我蠶業の現を遺憾なく謂い表はした適なる言葉であると、我も人も、否な國家が其然るを認め、又認めざるを得ざるの時逆に達して居る。夫れ故に此の重要なる蠶業の爲めには、朝野擧げて其の改良に心し、社會界の進運に運れ、種々なる方策を以て改善に就き講究せらるゝあるも尚改良に待つ事柄が、其ただ多い、蠶見嘱一の個將たる桑樹に關し、或は飼育上のことにまれ、繰絲上のことにまれ、製絲上のことにまれ、又は蚕本たる蠶業上のことに於て研究改善に待つもの實に數多とである。其急を要するひの秋きは、特に重きを之に置き、其急を要するひの秋である、蓋し蠶業の根基は蠶業者にあつて其品種の優劣は飼育の難易成績の優劣多少に關係し、延ては

製品即ち生絲の多少善惡に及ぼし、小にしては養蠶家の經濟を支配しては國家の消長に關する所以であるから、此の良種の撰擇改良は實に要務中の急務である。

善良なる品種

善良なる品種とは蚕性頑健であつて、飼育容易に收繭豐美にして、絲量多であつて、且つ給桑量に對する收繭比較的多きものである、然り以上の諸點に於て、能く吾人を滿足せしめ得ばは是れ即ち善良なる品種である、品種撰擇の要は宜しく之れに即りて、其欠點にを選むべきなるとと同時に其欠點に向つては改善を加ふることに務むべきである、然り而して之等良種の撰擇改良なるものは、要するに本邦蠶絲の聲價を高め、從て養蠶經濟を豊かならしむる所の手段の一であるから、先づ以て本邦蠶絲に對する、海外の批評を明らかに、欠點は之れを補ひ、以て其好みに應ずる様改良に盡すことが肝要である。

本邦の蠶絲は其色純白なること、練減歩合の少なきこと等の特長を有するけれども其欠點として顧客の蠶らす苦情は、實に左の修々である。

一、繰度均一ならざること

愛知縣蚕種製造所繰糸場（蠶業試驗所提供）

（撮影　讀賣新聞社）

二、絲纖に細むらあること

三、節多きこと

四、結交の不完全なること

五、荷口不同なること

六、二本揚三本揚等のこと

等である、尤も之等の欠點は繰糸方法の不良機械の不備に原因し一大原因たるに相違なきも、機械の不備に於ては繰糸に細むらあること、節の多きこと、等の欠點は、徒らに繰糸方法の不良機械の不備にのみ、歸せしむべきものでない、不備より之等の實に決して輕きに値に顧節たる繭に於て、其原料たる繭に於て、又は其繰糸に於て均一を欠くことは其だしければ如何に繰糸に熟練し、機械の精巧を用ふるにもせよ、其欠點を一掃することは至難のことである、之に反して其原料繭に於て節少なく、解舒良好なる繭にして先天的に其繰糸術の巧妙と完備せる機械とを具備する場合は滿足なる製品を製出し得らるゝ、元來製品の欠點は其原料たる繭の善惡に基づくものであるとは明らかなる所であるから、其品種の改良撰擇を計のこと、例へば繰糸術の未熟であつて、且つ機械の稍々不良なるにもせよ、此の較的善良なる繭を以て製品を製出し得らるゝ、顧る與つて力のあるとは明らかなる所であるから、其品種の改良撰擇を計

り、以て原鶏を改良し、而して製糸上の改良と相待ち、宜しく海外顧客の嗜好に投ずる様務めねばならぬ、之れ實に其販路を擴張する所以である。

聞く所に依れば我蠶絲は其精良、未だ遙に伊・佛の夫れに及ず、産額又清國に讓るとのことである、畜鶏努力之が改良發達に勉め以て伊・清を壓倒し、歐米市場に於て我邦の特産として、雄飛の覺悟を以て到み、而して英の鐵たらしむべく勉むべきである、今左に當試驗場に於て我邦の特産として、雄飛の覺悟を以て到み、而して英の鐵たらしむべく勉むべきである、今左に當試驗場に於て種類試驗成績に於いて、最良種と認めたる卵形又昔を黑會するとせう。

卵形又昔は其名の如く鶏形卵圓形（楕圓形）である

と聞かば當業者は、先づ其主旨すべき肝要なる鶏の特性の如何に係らず、其形狀の在來種に異なるの故を以て直に之れを排斥せん、之れ然り、何ら怪むべきの故なるを以て直に之れを捨てるなく、車を廢し徒し遂の氣象に乏しくして、改良の聲估通暢である、日進月歩殆んと底止する所を知らざる、此の活然たる世界に立ちて、徒らに舊慣を之れ良しとなす、農家養蠶家の世界に立ちて、徒らに舊慣を守するが如きは、決して策の得たるものでない、宜しく其長を採り短を補ふの覺悟を以て、着々改良の實を擧げなければならぬ。

本種の鶏形在來種と異なり、卵圓形なるは寧ろ其特徴の長所で、之れに者慮して價するの主要なる事項たれば、少しく其鶏形に付きて述べやうと思ふ、今本種の由來を尋ぬるに、武州・上州・又邦の人、故加藤勝平氏の改良になれる者であって、氏は本邦生絲の缺點を嘆いて、良種の必要なるを悟り、以來幾星霜一日の如く、苦心經營品種の改良に勉め、特に鶏形卵圓形たらしむるの必要を思ひ、鶏形たるの秋、無情病魔の侵すところとなり、遺憾遂に香一炷の客となった、嗚呼蠶界の恩人よ、以來常場に於て飼育して來たりたるものである、而して其前身は在來の又昔種より改良化せしめたるが如きは、嘗て所なき事實である今蠶史の一端を繙いて、更に又昔の歴史を紐ずるに。

其來歴に就ては種々の說をなすと雖も、何れも大同小異である。而して就中信ぜざるべからざるの說は、奥州に有名なる又昔蠶種の本家と傳ふる伊藤文郎氏の果代の同家には、其形狀中縱なる品種であるが、其中縱なるものに麥粒形と稱する南瓜の如きものもあり、又種の如きものもあり、元祿年間の頃は種々名なくして、單に春蠶或はハルゴと稱呼せし云々の記載最も信ずべきの說である、爾來幾多の方面に流布し、時代の嗜好に連られて、遂に縱目を生じ、雨端の尖りを去り、大巢となる中巢となるの結果を生じたる樣である、而して同氏が飼育する所の又昔は、今尚ほ縱目淺くして雨端少しく尖りたる狀は角又に近似たるものである。

六十日間旅行管見

本會評議員
山梨縣蠶業會長
八田達也

去の一編は魚取、鹿島鳥、氣樂の三題下よりの招聘に應じて淸明老馬六十日間旅行に考へ、客年十二月二日、無事歸來せられたる同氏小型三日其旅行に訪ひ、聞き得た概略である。

ヤアー今電話を聽けた處だ、未だ出勤せぬと云ふ、朝寢にも呆れるジャないか、東京へ來たらモ少し早く起きぬと駄目だゾ……ナ、左樣か、何がなんでも今迄寢ても居られまいとは思つたさ、アハハ、ナニ御土産げ……、昨日のでは足りぬと云ふのかい、ア、御土産話しか、有る〳〵何しろ六十日だからナア……一日に字分づゝとしても三十は慥かさ、トハ云ふものゝ、だ、御ふくして書くなよ、觀察と云ふ氣の利いた御旅行にもしなければ意無くして可ならんや……デあるが、將基て云ふなら飛車、角を勉めた樣なものであるから、成つて見た處て、駒筋違ひか、前後に歩るける迄と同じ樣に、飛んだのを美引け、成つた處で金か銀の役しかせぬジャないか、吾輩と雖も左程本務が疎察でないから、材料拙貧とは參らんネ……田掛けたのは御案内の通りとても云はふか、長野の總會か濟んだ翌日、御別申したのが十日午後三時半、汽笛一聲新橋をデスカ、マアソンナモンデ。

雨に降ける白髮銀髯の老翁

十一日岡山に着いて直ち、中國鐵道に乘り換へ、津山に着いたのは午後二時半頃であつたろう、少しは早いと思つたが明日二十里餘りも車に搖られねばならぬと思へば疲も先に出て來る樣の氣もしたて、泊して翌朝四時、雖ひ眼をコスリコスリ車上の人となつた譯さ、降りみ降らずみとでも云はふか朝からの陰鬱スマケに山道……氣色かい……夫れは折々あつたが、山と川とは感心もの仕らんさ、何にしろ折々雖氣は來るし、山道の心易さに感得よりも温得主義で、寒暖に頓巾と云ふ田で立ち、モウ三四里行けば御役目が濟むと云ふ黄昏近く驚いたのはショボ〳〵雨が降るのに傘も挿さず、白髮銀髯の老翁が路傍に佇んで居る、行き過ぎ樣とすると「八田君」とありませんか、と云ふに、好く見れば東伯郡の蠶種同業組合長の富盛翁さ、驚嘆を叙して我に蹈れば頭巾姿も可笑しい話さ其外五六人迎に來て與れたよ。

吾輩が偉いのではない

風俗か、ソーサ適當の言葉も見當らぬか酔厚とでも云ふの

かな、禍ねて來る人か袴羽織若しくはフロックコートデ兎に角、職服を着けはものはないナ、ソレから講話か博むと總代らしい人か必ず立つて盤瓶の挨拶をする、それが濟むと又總代らしい人か立つて、職と掛盤をすると一同か立つて職をして夫れからてなけねばと一人歸るものはないと云ふ樣な風で、一寸關東には見られん風習さ、

講話合か、倉吉、鳥取、八ヶ橋、來子の四ヶ處であつたが、僅かに秋蠶の氣運は渡なもので、今に初まつた事ではないが非常の勢を以て擴張しつゝあるな、抽如きものても、秋蠶の話しとなれば、大劇場も溢れんばかりの景氣だからなあ、

ナ――アー我輩か偉いのではないよ時運か偉いのだよ、勿論桑園も製絲場も見た、何か、

鳥取の蠶業中余の眼に映せし？

と訪ふならば、原々種の製造と種類の一定に在るネ、知つての通り伯州又なるものは元々佐平又から來たものに相違ないが、現在に於ては僅かに一の形式を供へて居る、近來原々種製造に關しては其効果如何に就て疑ふものもあるが、吾輩の觀察に依れば斯學は僅かに成効して居る、行つて見る價値を博した山陰蠶業試驗場に於ては原々種の原料なれば之と盛ぜざる可からず、此原料なれば之と盛ぜざる可からず、此原料なれば之と盛ぜざる可からず、此原料なれば之と盛ぜざる可からず、此原料なれば之と盛ぜざ

横に見聞を得ない、元より老練なる蠶井君の手を待つことは、大の關係あることは疑ひない人或は繭の形狀、蛾等は繭の組織等は絲の如何に多大の關係あることは疑ひない者あるも是等の不學のものに、依て生絲を靑一ならしめようとして工女を奴隷するよりも此較的相似の繭屋から奪一を求むるの鳥い事は識者を待つて初めて知るべき義ではないだろふ、

らしい人か必ず立つて盤瓶の挨拶をする、それが濟むと又總代らしい人か立つて、職と掛盤をすると一同か立つて職をして夫れからてなけねばと一人歸るものはないと云ふ樣な風で、一寸關東には見られん風習さ、

講話合か、倉吉、鳥取、八ヶ橋、來子の四ヶ處であつたが、僅かに秋蠶の氣運は渡なもので、今に初まつた事ではないが非常の勢を以て擴張しつゝあるな、抽如きものても、秋蠶の話しとなれば、大劇場も溢れんばかりの景氣だからなあ、

ナ――アー我輩か偉いのではないよ時運か偉いのだよ、勿論桑園も製絲場も見た、何か、

鳥取の蠶業中余の眼に映せし？

と訪ふならば、原々種の製造と種類の一定に在るネ、知つての通り伯州又なるものは元々佐平又から來たものに相違ないが、現在に於ては僅かに一の形式を供へて居る、近來原々種製造に關しては其効果如何に就て疑ふものもあるが、吾輩の觀察に依れば斯學は僅かに成効して居る、行つて見る價値を博した山陰蠶業試驗場に於ては原々種の原料なれば之と盛ぜざる可からず、此原料なれば之と盛ぜざ

横に見聞を得ない、元より老練なる蠶井君の手を待つことは、大の關係あることは疑ひない人或は繭の形狀、蛾等は繭の組織等は絲の如何に多大の關係あることは疑ひない者あるも是等の不學のものに、依て生絲を靑一ならしめようとして工女を奴隷するよりも此較的相似の繭屋から奪一を求むるの鳥い事は識者を待つて初めて知るべき義ではないだろふ、

余の老婆心

を以てすれば、年々複製する爲に繭形の縮まるのと蚕將來交通の便が開けて、他府縣から糶買に入込むものゝある、驚に果して現狀維持が出來得べきや否やに在る、左ればとて無暗に大量を好む時流を逐ふのではない、寧ろ生絲の盤一を期する上より云へば現形は一なりてあると思ふが、是を複製して永續した將來は如何のものかを氣遣ふと、同時に、將來の糶買に對する法案は今から考究して置く必要があるだろふ。

一定の種を掃かして出來上つた繭はどうする

と云ふのか、繭が出來上れば各々が製絲場へ繭を見せ込む さ、其處で製絲場では持ち込んだ繭に就て査定して最優等の繭へは米十五俵以下夫の賞與を與へて可成優物を造らしむるに勉めて居るから、撰繭も充分に行き屆いて、相方共利便を得て居るのは實に悦ばしい方法であると盛じた、處に據れば製絲家又は仲買が拵方繭家を語み倒せる次第 踏み倒して、我利のみを計て居る處もあるに、右の樣に相提携して相互が利益を得るに勉めて居るのは酷厚の地でなければ見

られぬ現象と評も限るまい ヲ希くは蠶絲業地は普斯くあり たいと思ふ。

鹿兒島へ着いたらサー大事件

御約束の日子も濟んだので鳥取を辭したのは十月十九日爾來三日二晩の樂り續けて二十一日午後五時半鹿兒島へ着いたが、疲れて身體細の如く定の宿に入つたが、オンジョ（老人ノコト）、バッサン（婆婆）、メロ（女中）等打寄つて「長いガ御道中疲れてオヤット樣こあります、サアー弱タ、樂に内して呉れ御疲れ樣」と云はれたが、何が偖谷點に行かばこそ、サアー弱タ、樂に内して呉れ御疲れ樣師に通報を聞んだ處がオヤット樣こ心なることが判つて先ゞ安心したものゝ、疲れは拔けね、以前の樣に左が刺く頃だと空元氣も附くが、蠶業手には疲れは寄らぬョ僅かに殘に至れば甘蔗は弱いものだ。

月照法師の餘香を拜して海を渡る

翌日休養所和田技師の樂内で、城山に昇り、西南役の昔を偲び、下つて岩崎谷に登る南州翁終の地及び同翁居の洞穴を弔ひ、州翁の墓前に額つき、月照法師の餘香を拜して愈々演習に發るべく鹿兒島を横つて先づ肝屬郡に入つた、地勢か……山を越へ谷を頁りさ、夫れから喰啖郡姶良郡薩摩郡日置郡等大隅薩摩の二ヶ國に亘つて四週日間の愛跳、伸ヶ御易くなかつた……見聞か奇の奇、珍の珍たるものも少くない。

東京蠶業講習所製絲場一部の景（其二）

吾輩の觀察した鹿兒島の蠶業

に就て話せと云ふのか、ソーサ現今大隅薩摩の二ヶ國て產繭額か二萬四千石餘に過ぎないから振つて居られぬ、是は僅かに方針を誤つたからだ、是は蠶業試驗者か誤つたのてなくて、傳へるものか誤つたのだ、即ち心を傳へなくして形骸を傳へたからてあるト云ふのは、維新以後蠶業か有利の事業てあると云ふ事を聞くや、遠く奥州を遠想して之に從事せよふとするものは、鹿島地方へ行つて之か傳習を受けたものだ、受けたは好いか其意を了せなくて其形式を採り踏つて來て蠶を養ふ段に下つて近來凋落の殿かい春風の吹く頃に先づ目張をし、火を入れて熱心に農作を所て見た處か辻妻の合はぬ事か多いから、多くは失敗又失敗で、鹿兒島では蠶は育たぬものと思はしむる樣な成蹟であつたが、失敗は成効の母

て、今度は色々に工夫して火を入れず目張をせずに行つて(見たが、好い結果を得たので嬉しく其意を悟る樣になり、追々試びる樣になつたと云ふ經歷を有つて居るが、衛妨種であると云ふ評は免れまい。

驚いたのは大小不同の佐平又

山を越え谷を渡りながら、當業者の家に寄つて、在る繭を指して聞けは佐平又だと云ふ、聞いのも佐平又、何んても蚊でも佐平又には勝かはず驚いた、實物を知らなくつて名に寄つて種を求むる弊があるが、其實を知らぬからと云ふて、何んても蚊でも佐平又であると云ふて賣り付ける種屋も亦た酷なものであるネ、兎に角先進者を以て任ずる蠶種家が其實を知らぬのを好い幸に誤魔化し付けて我利のみを計り、誘掖と云ふことを後廻しにする樣では蠶絲業の大發展も心細い感じがする……と我に返りて懇意談論切ること暫してあつた。

縣下一般の氣運

か……大に蠶業の振興殊に秋蠶に向つて最大の精力を集注して居るらしい、言一句も聽き漏らさぬ、吾輩の如き淺學の講演も遠近より集ひ來て一言一句も聽き漏らさぬ樣に勉めて居るても明であるが、或る縣官曰く、此土地は得て集まらぬ處であるが今斯の如し、蓋し空前の盛會であるが、是抑も機運が然らしめたか、將亦八田君が偉なるの致す處か、と忽ち答へて、此八田が偉なる故なるべしなどと冗談を云ふた樣な有樣であつた、是等て其機運は察せらるゝであらう。

千歳の一遇

十一月十六日鹿兒島を辭して海路を取り、十八日午前十時神戸沖に着したが、海上は波靜かで活き滿ちる大平洋人となつた時は、自分ながら豪くなつた樣の氣がしたよ、豊後灘へ差しかゝると波が少し荒くつて船は傾むいたが、無感覺の加減か船暈の御見舞は受けなかつたさ、神戸沖に着くと幸ひなる千歳の一週觀艦式の御盛儀を遙かに拜し奉つて但馬に向つた。

但馬の蠶業

はドーかと云ふのか、サアー同縣は古くからの養蠶地で、農家と養蠶家との割合の多いことと及桑園の多いことは實に驚くべきものだよ、畑も畑あらんか桑ならざるなしと云ふ有樣だが併し其經營が古ひ式けに桑園は古代式だ、仕方は木で多くは天然に委せてあるから、摘桑に不便で、且つ桑の葉が硬いと蚕いのと坊を得ぬ爲めに、秋蠶の飼育は殆んど零の姿さ、左りながら秋蠶の利益なることは、各自が認めて居るし又機運も向て居るさ、夫れ故に漸次桑園も改良さるゝだろふし、亦現に擴張しつゝもあるよ。

設計中の風穴を見た

設計中の風穴とは、何んて云ふのか、夫れは城崎郡の神鍋山で、殆んど完全らしいから、完成の曉には大に秋蠶の孵化を促すだらふし亦物數もあるだらう、兎に角に桑園の改良と秋蠶の擴張とは斯業の爲に驚異すべき事である、但馬製糸株式會社……見せしたよ、殆んど完全だ、ね、兎に角從業の緩密の注意を拂つて經營して居るさ。特色の左樣さ、繰糸工女と養蠶工女と別にしてある點だろふナ、其富合の編織工女四名を撰んで別に居る、其に百四十人の繰糸工女に對して、然練の工女一人を置くと、其編織工女に蠶の均一を計つて居る、其利害得失か……人に依つて見解を異にするだらふ。同人の發明した撰繭器は普通のものに比べて四五倍早く而も確實だそふな、厚意に依つて横型を貰つて來たが、縣農會へ送つた。

昔しは一竿今は何尺何寸の掃立

驚いたよ、其話しは、岡老人（前横濱生糸檢査所長たりし岡毅氏のことゝ）から聞いて居つたが、今まで一竿二竿の掃立が在るかと尋ねたら、養父郡の大屋地方では昔しは蠶種を幾竿掃くと云ふたのは木當の事で、是は六尺竿に蠶種の枚數を調ふることなく適宜に帛して、一竿と云ふたもふだが、今では此習慣は廢れてないけれども、まだ蠶種の枚數を目はなくてゐるそうな、丸で晒の樣な話しさ、十年前養父郡伊佐村の某とか云ふ人が、蠶量一貫目掃くと云ふが、敢て眉毛へ唾つけて聞く話しでもなさそふだよ。

さあ此邊で御免蒙つて置て晩餐も來たから喫はふじやないか。

大都市に於る蠶種の貯藏は如何にして經營せらるゝか

帝國蠶種檢査會社
專務取締役　高橋虎太

世は狂ひつゝある時節の十日間旅行の出發は一月一日發行の準備で忙しい筆中、片岡と云ふ人がやつて來て、ノ切後だけれども是非蠶種貯藏の處答なしたいから、一貫入れて呉れたいと云ふ請求、原文を見たら東京の眞中で、蠶種の貯藏をすると云ふ廣告だ、是は面白い話しと云ふ訳で、出發明石町の冷藏庫式會社へと駆け付けた、不景氣の上に盛會なく吹き捲く木枯は、人通り少い場所を一層強く吹き浸ふから唯朝りの答量に横ゝ凍しまふな見てのつた。

冷藏庫とは如何なる處か

マア、一通り御覽下さい、御覽下さつた後でなければ話しが工合が悪いからとて片岡君に案内されて通見た、茲が氷所、茲が蠶種貯藏所、茲が魚類、次に鳥類、次が肉類、次が果物であつたが、最も多かつたのは肉類で四四切の肉が山の樣に埋まれたのが凍てカン〳〵して居た、入口の二間もある上の外に敷早、京都帶の當見品もあつたが三縣下の記事に止めて置く、六十日間の旅行講演、奇劇曲所、折々絵画を交へての楽識、日は暮れたので御座おち本編の本筋なきが眞珠手取で割れた、答量の都は迫も八田縣の座談的雰囲気の流を路に得の讀者諸賢許されよ（少見）

らふと思ふ人には取り出した肉を下げて微温で解かしつゝあつたが、肉林とは是だらうと思つた。

ア、御驚濟になりましたか、御驚の通り冷藏庫と云へば世間では氷で冷すと云ふ樣に、思ふ人もありまして誤解され易いのは未だ此の冷藏庫なる事業が、日尚淺いので致方ありませんが、御案内の通り機械の力で空氣を冷しませんければ氷で冷すと云ふ樣な事では大仕掛な事は迚も出來ませんです。

海外に於る冷藏庫の發達

に就ての御尋ねですか、廣く世界に應用さるゝ樣になつたのは、近來のことで、其應用の盛な米國でさへまだ四十年は經ませんからネー初め紐育、ボストン、シカゴ等で一二小規模のものが試みられました處が、其効用が著しく其應用が廣くつて有利でありましたから非常な勢で各地に擴まつて只今では一ケ所で數千坪もある大倉庫が建てられると云ふ有樣で、人口二三萬以上の市街には一二の冷藏庫がない處は殆んどないと云ふ勢です、殊に露州に於る蠶種の耶蘇は土地が土地だけに其地に於る產業の生命を支配して居るのです。

何ふして蠶種迄貯藏する計畫をしたかと云ふのですか、立派に申上げたら國家的觀念から、下手に申上げたら會社の維持上からですが、初めつから蠶種を貯藏するへて二萬八千立方尺の場所を造つて居ますが、私達の素人で貴廳方の前で講釋も可笑いですが、蠶種は蠶の重要問題で、於て蠶種の貯藏と云ふ事は、蠶業に限ず春蠶でも、殆んど農民の刈る秋蠶に限ず春蠶でも、殆んど農民の刈る處である樣に承りますが、今日では天然風穴に據る外、方法が全く有ません樣です然るに此の天然風穴は各地に多くありますが、温度が高かつたり低かつたりしてどうも始終一樣には參りません、其上に風穴の在ります場所は多く山間であるから運搬が不便で、多くの日を費したり又出穴の折は僅く樣な風穴であります、好し穴に在る間は完全に貯藏が出來ますとしても夫れ以後に於て不便の爲故障を受ることがあります樣な場合は多く、あらうと思ひます、夫と同時に秋蠶種取出の期節などは降の時日に取り出す事の出來ぬと云ふ缺みもあるから、斯くては蠶絲業界に受ける打撃は少くない樣に、隨つて蠶業の消長に關するから、と云ふので、貯藏料を安くして貯藏の委托に應じ樣と設計したのであります。

何處か風穴に勝つて居る

と云へば、温度と濕度は常に均一を保つことが出來ます即ち風穴は間斷なく動いて居りますから、晝夜數回、興醒いたしますから、温度も濕度も少しも高低が御處いませんが、温度と濕度ですか、夫れは京實驗場の冊數に徙ひまして温度は華氏の三十二度濕度は八十度と変じて庫の中の空氣は常に新陳代謝して居ります第一此點が勝つて居ますのと第二には空氣が硬料で好風水害が在りましても取り出すことの出來ぬと云ふ愛が御座いませんマア東京が流れますか埋まつてしまう迄は大丈夫ですアハヽヽ

二萬五千立方尺の貯藏室

第一が一萬五千立方尺第二が一萬四千立方尺御處いますが、準備の分を加へれば合せて二萬五千立方尺位のもの です　此内に五百萬枚は優に貯藏することが出來ると思ひますから一府縣の同業者が同じて御委托下さつても御氣に召した處へ樂に參ります試驗ですが東京の蠶業講習所で二化性の新品種を年年種を貯藏されまして五月二十五日から七月十五日迄六月に御出になりました、發生迄の日數は十二三日で個所の模樣及發生は一般の風穴に比べて異狀はないが發育、爲は良好であると云ふ事で御慶いますが、吾國に於きまして此試驗は未だ其經驗を聞いたばかりでありますから、爲慎する人り多かろうと思ひますが、勝家試驗を重ねます毎に其成績が優良であることを示すべきは問であろうと思つて居ります其外には愛知縣で千二百枚、靜岡、鳥取などでも試驗的に委托されました……以上は錢話の大要であるが、再發が見た處では、其日常外空氣で寒かつた加減か、庫内も餘り冷いとも感じなかつたが、實驗計は三十二度で中央をウネ〳〵通つて居る鐵管には室内の水分が、針狀に凍付いて居つた、今自分の疑問として國に殘つて居るのは、室内の温度を華氏三十二度の氷點として置くことが出來樣か否かの問題である。

因に祀して驚く蚕物蠶料は蠶種百枚迄一錢四錢、五百枚一枚三錢、千枚迄一枚二錢五厘千枚以上一枚二錢つゝの割合であるが、一口の蠶種を分けて庫出する場合には枚數に依らず一厘宛に五錢づゝの率割料なること――此貯藏料が安いか高いかは普通の蠶に云ふべき筈はない。（分見）

予の視たる印度の蠶絲業

學藝委員
農學士　須田金之助

須田農學士には野蠶研究の目的なる及び昨秋印度視察の途に上られ蠶業講習會へ立寄られたから其視察談を拜聽した何分旅勞中の際とて充分に之を聞くことの出來なかつたのは遺憾とする處である併し乘士には最も興味と實益とに富める視察報告を後とから寄稿せらるべく約束されたから今は只其談話の概略なるに過ぎることに云ふ次第

印度視察の路順

私は九月十二日に北海道を出發して門司へ出て直に「チー

フ」へ行つて主として拵蠶絲の事を調らべました。「チーフ」から南南へ出て農學校工藝局其他各種の學校を視察して、其歸途西州府へ立寄り其處の蠶桑學堂を見、更に上海から杭州へ出て蠶學堂を見て印度へ行きました、印度では「コロンボ」から「タンゲヴォール」「マドラス」を經て「カルカッタ」へ行き其處で五六日間滯在して「カルカッタ」政府に就て其地方の蠶業を取り調べ夫れから「ベンガル」へ行つたが「ベンガル」には官立の蠶種製造所がありました。「ベンガル」から「ダヂリン」へ行つて「ヒマラヤ」山見物を爲し其帰途に「ブサレ」へ行つて農業研究所を視察しましたが此地方にはエリ蠶の飼育がさかんなる處ですから、之に就て調査をし大に得る處がありました、夫れから一旦「カルカッタ」へ戻り「ナブル」に開かれてあつた品評會を見に行きましたが、品評會といつても何も見るべきものなく實に詰らぬものでした、夫れから「ボンベー」へ行つて絹絲紡績を見、更に「マイゾール」州の「バンガロール」へ出て、養蠶業の實況を視察しました、此處には日本人の大津喜藏氏が「タ、ー」商會へ這入て養蠶を行ひ尚彼は日本から製絲器械を取り寄せ製絲業を經營して居られます。

新嘗會の模擬國旗製造所第一部所員に出品し好評を得た大石麻麻成之氏記念撮影

「カシユミール」地方の養蠶の事は品評會に來て居つた人から聞きましたが此地方の養蠶は一年に八回位行はれるさうです、てイッ捕立るといふ風で其蠶桑は桑が年中落葉なしの狀態で繁殖ですか……骨捕木法に依るのですか……左樣仕立方は大抵刈桑仕立でありました……私が彼地で見ました蠶見はイロ〳〵有りました、掃立てた計りの蠶見はあれば上蔟しかつたものもあり、中には既に上蔟して仕舞つたものもありました、尤も之等の蠶は骨多化性のものでしたが段々開いて見ると土人は一般に一化性よりは多化性の蠶を好むさうです、といふのが畢竟一化性の蠶は繭合高は良つても蠶種を産る間が長くて何遍でも飼育するといふことが出來ない之に反して多化性の蠶は年中何遍でも繰返し〳〵飼育することが出來て、而かも其飼育が容易であるからです、けれども此地方の多化性蠶の結んだ繭は非常に惡くて一俵の絹糸繭に四五六遍の繭を要する位のものですから、政府は之が改善の必要を認め

近年一化性蠶の飼育を奬勵して居るさうです、で或人は其奬勵法としては完全なる貯藏庫を拵へて其處で蠶種を貯へ適當の飼育時期に取出して各養蠶家に配布したならば宜しからうといふやうな說を持つて居るさうですが所し夫れはマダ實行されて居りませんでした、尤も「カシユミール」地方では近頃政府の奬勵に依て餘程一化性の蠶見を飼育するやうになつたさうです……其蠶種ですか夫れは多く佛國の「ラルデセー」から取り寄せて居るさうですが、私の考へには日本からも一つ彼地へ輸出して佛國の蠶種と競爭させてみたならばドーかと思ひます、斯ういふ事に取ては佛國の人などはナカ〳〵盛心心のものです、佛の「トーマスワード」氏の如きは非常な熱心で今五萬オンスの蠶種を買入れて之を「カシユミール」の政府へ送るさうですが「カシユミール」政府は之を農家に配布して無制的に飼育せしめ其出來た繭は買上げて官立製絲所で絲に繰るやうにしてあります、其製絲所は佛國式であつて將來「カシユミール」地方から澤山產出して英國へ送り其巻くの需要に應ずるやうにしたいといふ希望を持つて居るさうです、製絲の方法は日本の仕方と似たものですが蠶室蠶具などは大に違つて居ります、又鈴桑の如きも一日に四五回位しか與へず而も其量も勝て、ナゼソーするかと聞いた處が餘り澤山桑を喰はせると蠶が死んで仕舞ふと云つて居りました、蠶の病害ですか左樣印度の北方には黴菌が居るけれども南方には少しも居らぬといふ事です。マー今日は急いで居るから爲しい話は追て後から書いて送ることにせう左樣なら……

桑園の改良如何にして爲すべきか

桑園の改良は如何にして爲すべきか

群馬縣老農　中山重兵衛

十二月上旬とおつた桑園課のフーアーとも領國なく帙を來る日新町からガタ〳〵馬車に乘れつゝ上州藤岡にいつて群馬縣の著名中山重兵衛翁を多野郡役所に請ふの翁數時ずして蠶界の勝勢目に滿なる說之を檢同する取唱桑園の收穫に存りとの怪無焔をいた謂ふ幾個を總續するに願すといひつゝしてあるから錄して本欄に載せるとした。

桑園の增殖は寧ろ憂ふべしである

何か當業者の參考になる樣な話といふ御注文ですが……突然て其だ用りました、左樣實は近頃桑園增殖といふことに就て農商務省始め補助金を交付して盛に奬勵して居りますが國產の首腦たる蠶絲業を擴張するといふ上に說きましては誠に結構なことであります、結構なことではありますが、果して其實益があらうかどうかといふことが問題であらうと思ひます。

一體桑ばかりではありませぬ、大方の農作物でもさう段別を殖したとても其割合收穫が增加するものでもさう段別を殖したとても其割合收穫が增加するものでもありませぬ、否な或場合には此反別增加といふことが農業經濟上に非常の不利益を與ふることが決して少くないのであります、昔から「澤山養りたければ少く作れ」といふ言葉がありますが誠に金言であると思ひます、之は一寸聞くと極めて不思議の樣で

すが少しも不思議な事はない、成程耕地面積が殖えれば之に対する生産量が殖えさうなものですが實はさうでない耕地面積が殖えると先づ肥料が深山入る、次に人手が深山入る、次に又需要供給の原則から其の需要の増加に從つて其の價格賃銀を上げて來るから、生産量は多少殖えるかも知れぬが高い肥料と高い賃銀とを喰つてやつたのでは効利益がない、且つ管理手入が行屆かぬから生産物の品質は悪く分量も思つた程は多く殖えない、從つて値段も安い。金々刷に合つたものではない、嵩が之に反してドーも收穫が尾ちぬと思つたらば少し丹精するがよい、又耕地の面積を減らすのも良策の一である前に述べた如く同じ面積から多量の生産物が得られれば同じ面積が少いから肥料が比較的入らぬ、人手が省けるソレで管理が行屆くからよい而して品質の良い物が割合に深山疎れるのではあるが品質の良い物が割合に深山疎れるのです、桑を深山疎らうといふのならば必ずしも桑園を増殖せんでもよい、増殖した處で、ソー大した效能のある譯でもなく却つて蠶業經濟上に少からぬ不利益を與へるのであります、之は前の理屈と同じですから更に申しますまいが此様な理由で私は桑を多く疎らうとするなら。

寧ろ桑園を減らした方がよい

と思ふのであります、又桑園を減した處で遣り方に待りましては今迄以上に多量の收獲を得ることは何でもありませぬ、これは決して私の空理空論でない、やつて見ると立派に出來るのである、……

……それはドーするのかといふのですか……左樣夫れは土地に依つて色々ありませうが、先づ手入即ち桑園者の生理を深く考へて夫れに適應した肥培を極めて懇切にするのが一番宜いと思ふのであります、之には耕耘の方法、施肥の方法、伐採の時期等が最も深く關係して居ります、奈何せんドーも研究といふことが足らないものですから、自分に適當法を發見するといふことが少ないのであります私の御話しするのは實長い實驗の結果で所謂机上の空理空論ではないのであります、それでは

施肥はドーすれば一番善いか

と申しますと、ドーも之は推肥を用ふるのが宜い樣です、近來では燐酸だのポッタースだのと非常にむづかしい名前の肥料を用ふる樣になりましたが、併し之れも時と場合とに依るの樣で、成程之等の分析表を見ますと何が○六とか何が三、一とか非常に立派な成分を有つて居りまして之れさへあれば十分な樣にも一應は考へられます、又之等の肥料だとても時に必要ではありますが、全然之に信頼して終ふといふことは大變な間違いだと思ひます、然るに今日では獨り私の地方ばかりでなく一般に地肥の使用といふことが非常に少くなつて來た樣です、昔などは朝飯前に一籠の草を刈つて來るといふのが殆ど農家の通法の樣になつて居りましたので地肥は知らず識らずの間に出來たものですが、今日では朝飯を喰はなければ野に出ない、其上燐酸とか何とか此頃の人造肥料を用ふるから極めて手輕に草履穿きか何かでスー〳〵とやれる一寸見ると、時間が經濟であつて佳い肥料がやれる樣であるが結果がまづい、殊に農家に此の樣な安逸の風が入つて來たのは最も警かはしいことであると思ひます。（未完）

桑園年中行事（承前）

愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
馬場由

二月（立春雨水陰暦正月節）

此月の始め立春の日から始めて春となるのであります。寒明けて立春に入る、前の夜を節分といひまして律々舗〳〵に、「鬼は外福は内」の聲を聞くのは此日です此時になりますと蕗のさゝ鳴も聞え、梅も一枝一枝紅白を點じ所謂、梅一輪一輪づつの暖かさ」になるのであります、此月の十一日は神武天皇の御即位の日であります、紀元節として何處もかしこも樂を休む、之に續いて初午があります、紀元節をかしに樂を立つて太鼓の音が響々と、聞えます、稲荷神社は豊受大神を祭つたもので養蠶の神たる保食神と同じであります。

な折りそと折りて呉れけり園の梅　太祇

初年や柳はみどり小豆粥　也有

桑の棚はまだ眠つて居る、桑の開葉が遲速を生ずるのは氣候にもよるが此時の手入如何によることが多いのです、即ち臨時施肥を行ふのです。

臨時施肥

臨時施肥は多量に施してはなりません、これは流れたり散じたりして失せる憂があるからであります、此施肥は桑の棚が芽發育を始めると同時に吸收されまして發芽を早める効があります、從つて根の發育を結める迄は、必ず分解して居る樣な性質の肥料を用ふることが必要であります。

國中即事

二月風似力、蠶運賢々包、籍咒生氣滿
紙上化機描、繁蠶年含・細、清明友浴旁
綱經天赤留、種・聰市・鍋簾、
狩人の霞にたどる春の日を
つまとゝ煙子のこゑにたづらん

鳥取縣の蠶業

特別會員　遠藤岩太郎氏報

明治三十七年兵燹に於ける我が鳥取縣の巻夏秋蠶の飼育戶數掃立枚數收繭高及價格左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、六〇五戶	一三、〇一一	六、八六六
掃立枚數	二一、九五六枚	六、五七四	五、四二一
收繭高	一九、四三〇石	四、三四九	三、二七八
繭價格	七一八、五七六円	一二七、一七七	一二六、一〇〇

明治三十八年度の飼育戶數は三萬六千百三十七戶、掃立枚數三萬四千四百四枚收繭高三萬五千二石、同價格百十九萬六千百二十九圓にして細別すれば左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、四八二戶	八、九七五	七、六八〇
掃立枚數	二二、二八〇枚	四、二三九	六、五二五
收繭高	二三、五〇二石	三、〇四七	三、九六二
繭價格	九〇四、八八九円	一二〇、〇四九	一七、一二〇一

明治三十七年度に於ては飼育戶數三萬九千四百五十二戶、掃立枚數三萬七千三百五十七枚、收繭高三萬三千三百八十九石、同價格百五十八萬九千百一圓にして細別すれば、

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、五八四戶	一〇、七一八〇	九、〇八八
掃立枚數	二二、八、六六枚	五、八八六	七、八五五
收繭高	二二、九、三石	四、一五	四、六五一
同價格	一、六四、二九二円	二〇四、八一九	二一、三三四

明治四十年の飼育戶數は四萬千八百七十五戶掃立枚數四萬三千五百五枚收繭高三萬八千二石同價格二百三萬三千十二圓にして細別すれば

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一八、六六五戶	一三、三七一	九、八三九
掃立枚數	二四、二〇三枚	九、四〇一	九、九〇一
收繭高	一六、八一二石	六、三九九	五、三六三
同價格	一、五二二、四八八円	二六〇、四六一	二四一、〇六三

明治四十一年度に於ては飼育戶數四萬四千五百七十六戶、掃立枚數五萬二百二十四枚、收繭高四萬五千四百四十七石、同價格百四十六萬千四百五十九圓なるが細別すれば左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、九一一戶	一三、二四一	一、四一三
掃立枚數	二六、五二〇枚	九、四一六	一、四一二三
收繭高	三〇、四〇〇石	六、八五四	八、一八三
同格價	一、〇一一、〇四〇円	一一三、三二一	二四七、〇九八

鳥取縣蠶種製造額　明治四十一年度に於ける水縣の蠶種製造者は百八十四人生繭買者百八十九人殺蛹乾燥者三十九人にして風種用種製造數買數三百五十六萬九千七百三十四蝶にて同據定數に二十一萬五千五百〇六蝶製種用種製造數は三萬三千三百七十一枚なり。

鳥取縣の自家用蠶種製造額　水縣に於ては四十一年度の自家用蠶種の製造者は二百二十七人にして、原種用種製造蝶據定數に二千二百六蝶なりしが買數は二十二萬二千六百十八蝶にして、製絲用種の製造蝶定數は二千枚なりしが買數は貳百七十六枚なり。

鳥取縣の桑園　明治三十七年以降に於ける鳥取縣の桑園段別及び收桑高等を掲ぐに左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、五八四戶	一〇、七八〇	九、〇八八
掃立枚數	二二、八、六六枚	五、八八六	七、八五五
收繭高	二二、九、三石	四、一五	四、六五一
同價格	一、六四、二九二円	二〇四、八一九	二一、三三四

明治四十年の飼育戶數は四萬千八百七十五戶掃立枚數四萬三千五百五枚收繭高三萬八千二石同價格二百三萬三千十二圓にして細別すれば

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一八、六六五戶	一三、三七一	九、八三九
掃立枚數	二四、二〇三枚	九、四〇一	九、九〇一
收繭高	一六、八一二石	六、三九九	五、三六三
同價格	一、五二二、四八八円	二六〇、四六一	二四一、〇六三

明治四十一年度に於ては飼育戶數四萬四千五百七十六戶、掃立枚數五萬二百二十四枚、收繭高四萬五千四百四十七石、同價格百四十六萬千四百五十九圓なるが細別すれば左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、九一一戶	一三、二四一	一、四一三
掃立枚數	二六、五二〇枚	九、四一六	一、四一二三
收繭高	三〇、四〇〇石	六、八五四	八、一八三
同格價	一、〇一一、〇四〇円	一一三、三二一	二四七、〇九八

鳥取縣蠶種製造額　明治四十一年度に於ける水縣の蠶種製造者は百八十四人生繭買者百八十九人殺蛹乾燥者三十九人にして風種用種製造蝶數買數三百五十六萬九千七百三十四蝶にて同據定數に二十一萬五千五百〇六蝶製種用種製造數は三萬三千三百七十一枚なり。

鳥取縣の自家用蠶種製造額　水縣に於ては四十一年度の自家用蠶種の製造者は二百二十七人にして、原種用種製造蝶據定數に二千二百六蝶なりしが買數は二十二萬二千六百十八蝶にして、製絲用種の製造蝶定數は二千枚なりしが買數は貳百七十六枚なり。

鳥取縣の桑園　明治三十七年以降に於ける鳥取縣の桑園段別及び收桑高等を掲ぐに左の如し。

	春蠶	夏蠶	秋蠶
飼育戶數	一九、四八二戶	八、九七五	七、六八〇
掃立枚數	二二、二八〇枚	四、二三九	六、五二五
收繭高	二三、五〇二石	三、〇四七	三、九六二
繭價格	九〇四、八八九円	一二〇、〇四九	一七、一二〇一

明治三十七年度に於ては桑園段別見積段別四百十二町見積段別四百十四町
同　三十八年の段別　見積段別四百十四町
同　三十九年の段別　見積段別四百二十二町四反
同　四十年の段別　見積段別四百十八町一反
同　四十一年の段別　見積段別四百十四町五反
收繭高六百四十八萬六千六百貫
此價格七十六萬五千四百八十一圓

明治三十七年の段別　二千八八町六反
同　三十八年の段別　三千九九一町
同　三千百五町一反
同　三千百三町二反
同　四十年の段別　三千八百六十九貫
收繭高五百八十五萬八千四百六十九貫
此價格百十萬七千六百十三圓
同　四十一年の段別　三千八百八町五反見積段別四百十四町五反
收繭高六百四十八萬六千六十九貫
此價格七十六萬五千四百八十一圓

須田學士の書簡

拜啓愈御壯健の事と乍影本奬賞候小生義も無事旅行を標り居り候間御休神被下度候小生の印度に入りたるは十月二十九日にして爾來各地の蠶業を視察致候處致度考居り候も何分種々の都合より意の如くならず *Bengal Gooru weed* に塗り候も不得要領にて漸く *Murshidabad, Berampur* に塗り養蠶の實地を見申候養蠶の方法に亜ては敢て異なる所なき樣に候へども御承知の如く當地方は暑氣甚だしき地方なれば一化性蠶種は僅に *Kashmiar* の如き北方に隱られ何れも *Multicoline* のみを飼育居り候之にも多數の種類あり同地にては *Bombyx fortunatus* を主に飼育し居る樣に候小生の見たるものに漸く三眠に眠り居るものに候其器具類も日本と殆く異にして製絲の如きも多少泛來改良とする由なるも盤分面白きものに候之等に就て何か歸朝上柴細可申述候 *Pusa* に塗り *Attacus ricini* の飼育せるなり見聞致申候本日は小 *Naggur* に塗り *Eublillon* を見申候 *S.cerulaeus* に關しては始んど *nothing* に候明日は當地を出發 *Bombay* に塗り次て二十七日出帆の汽船にて十二月二十日歸朝可致候間何れ歸朝の上緒々可申候以上

吉池慶正樣　須田金之助
Naggur.

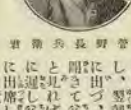
本邦實業界の奇傑

角田喜右作君

農政界の大立物として夙に實業界に其名を知られたる君が半生の活歴史を茲に公表するもの亡に則ち是れ、如何に活躍し如何に奮斗に慮せしか神速如何なる方面に如何に非凡の手腕を振ふべきかはどふ刮目して之を君が活歴に問へ

お山の大將

君は嘉永六年一月十五日を以て鄕里群馬縣勢多郡橫野村大字樽村に生る、幼時より性頗る快活にして敏て人に從はず、頑自ら持し、寇として三太郎の風あり、君が家は代々農を以て其業とせるも、君が曾祖父利根白川の流域を福島の聖堂に執りも根山を以て世に名を知られ、教鞭を取り、當時藤谷縣に職を奉じ、傍ら塾を開き、私塾を其家に開きて子弟の教育に振と父の如き教養を與へ、明治八年小學制の布かるゝに至るや、藤父君に就き三圓を與へ自己の精力を傾注せられき、君亦漸く長ずるに及びて


●第三回總會に於て植物を表彰せられたる
群馬縣勢多郡橫野村
角田喜右作君

寄寓せる學生と伍してよく伊伍の業を爲しさと雖も亦遊野、遨戲到らざるなく、聚あれば或は學生の蛍に入りて其學を妨げ、或は學生を率ゐて父母の愛し鯉魚を追ひて之を捕へ或は野に紙鳶を飛ばせて終日園圃を馳せる など殆どいふべからざるものあり、君亦山の大將を以て自ら任ぜるもの故なきにあらざるなり。

苦學六年

君が悪戯日に募りて嬢小なる變態を爲しさと雖も亦遊野、百物に加はるよ り、之が勉強策を爲すとを 藏ねて獨り冷たき學 大和守の教授前 橋なる醫井堂に 遊ばしめらる、 時に君正に十歳 くべき壯觀よ、 と眺めて小さき胸に として百年易らざる しさを味ひつゝあり、 ずかくて長亭を 殆ど別人の 觀を爲すに 至れり、時 日下に苦學 廣溢蓮 ること正に六年 君も

●第三回總會に於て植物を表彰せられたる
桑木八百吉君

天に沖する不屈の氣概、我も亦天に昂らん哉」
しかるに、今日は繰る 人事の轉變眞に知るべからず、 希望を走せしが、今日は繰る 鄕里を出でゝ孤鴈の淋 希くは我が父母に我が健在を傳へよ」と身の淋しさに故鄕を 暮ふ身となれば、秋來れば花と行く、鷹來に心を道 母の慟太郎今父 の嗚下を離れ 冷たき學 舍に人となる、 靜に天沖して白 雲と合する後間 の嘆昨日逝は鶴 なりき、昨日逝 の父

三回を懷にして東京に走る

君が十六歳のときなりき、いかにもして外史を購はんと欲し、嚴父に乞ひて許さる、乃ち當時開會なりし藤谷縣會に出席する嚴父に從ひて藤谷に出で其著を求むること、なりぬかくて藤谷に至り旅宿に投ずるや、嚴父君に就き三圓を與へ自己の精力を傾注せられき、君亦漸く長ずるに及びて

●第三回總會に於て植物を表彰せられたる
群馬縣勢多郡橫野村
角田喜右作君

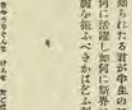
嚴父に乞ひて許さる、乃ち當時開會なりし藤谷縣會に出席する嚴父に從ひて藤谷に出で其著を求むること、なりぬかくて藤谷に至り旅宿に投ずるや、嚴父君に就き三圓を與へ自己の精力を傾注せられき、君亦漸く長ずるに及びて

●第三回總會に於て植物を表彰せられたる
群馬縣勢多郡橫野村
角田喜右作君

嚴父に乞ひて許さる、乃ち當時開會なりし藤谷縣會に出席する嚴父に從ひて藤谷に出で其著を求むること、なりぬかくて藤谷に至り旅宿に投ずるや、嚴父君に就き三圓を與へ自己の精力を傾注せられき、君亦漸く長ずるに及びて

●山梨縣多摩郡丸子製糸所現重長
警醒長兵衛君

ひべきかを尋ねんと父を索むれど已に縣會に出席したるあり終日父の歸宿を待てども獨らず夜陽けて疑につけば父は君が の如きと三日投宿以來共に伏して面かも相顧るの機なきなり、君、仍て意を決し、三圓を懷にして町に出づれば行くこと未だ幾何ならずして喇叭の音を聞く、行きて見れば馬車あり「藤谷縣御用達廳行」の旅客を驚して盛に呼び馬車に東京に至るをいふ。君東京の名を聞くこと久しくして未だ其地を知らず、而して今馬車は喇叭を吹いて東京に近く立ちに至るを得べしと呼ぶ、君遊意滿然たり、而して君私に思へらく、東京彼のいふが如く近く、容易に至り得ば當に外史を東京に


●第三回總會に於て植物を表彰せられたる
桑木八百吉君

求むべし」と乃ち馬車に乘ず、既にして車發すれば車聲轟轟として身は上州の野を馳す、斷々たる雲、坦々たる行路、君は未だ見ぬ鄕會の繁華を夢みつゝ、此間を行くこと久しけれども未だ東京の榮を聞かず、私に迫を怪しみ、車を怪しみ又君を怪しみつゝあるに馬丁來りて錢を求む、曰く一日四十錢なりと、君澁に其多額に驚きしと雖も先づいふが儘に之を支拂ひ、さて何時頃東京に着くべきかと問へば「何時も直き參り申す」と答ふ、君怪しめども又如何とすべかりしを覺ゆ、然るに馬車を遂り短亭を迎ふること十幾次、日將に沒せんとして面かも東京の顏を耳にせず、時に微風漸く颯ひて、塵赤漸く痛

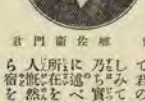
●福井紡織株式會社現業主任
田中律三君

夜の東京に入れる君、誠や果して何ぞ、問ふに知る人なく、宿るに知る家なし、大小の道路、錯然として亂の如かれども其何れを行くべきかを知らず、徒らに歩むに任せて行けば一旅店あり、入りて泊するに、冷酒極なし、宜なり只見る一田舍漢なるを……籠中を探れば所持せる金の大半は

八百屋の丁稚となる

始めて夜の東京に入れる君、誠や果して何ぞ、問ふに知る人なく、宿るに知る家なし、大小の道路、錯然として亂の如かれども其何れを行くべきかを知らず、徒らに歩むに任せて行けば一旅店あり、入りて泊するに、冷酒極なし、宜なり只見る一田舍漢なるを……籠中を探れば所持せる金の大半は

已に失はれ明日又此宿を立つ始はば餘すところ幾何ぞや、外史の求め得ざるは言はずもあれ明日以後の衣食を夫れ如何に既に意を決し、我遂に此の如くんば殘死せんのみ、宜しく獨立獨歩自ら衣食して大に學ぶべしと、乃ち五十錢を拂ひて宿を出で足に任せて行く〳〵適業の存否を糺ぬ、晴時に至るも何の得るところなく體倦み足疲れて殆ど進退すべからず、會々一八百屋に就きて安泊の所在を問ぬれば店頭を掃ける小僧手を停めて近くになしといふ、僧然として二三歩を行けば忽ち君の後に聲を呼ぶ者あり、顧れば八百屋の主人なり、君の怪しみて問へば其家に饑餓の草鞋を解きて勉學の志望を遂ぶ主人其志を嘉し暫く我家に留れと餘す、君之より早起晩歸、大根、恕を搗ひて市に商ふに至れも、嗚呼外史を購はんとして大根を賣る運命も亦奇ならずや（未完）



●第三回總會に於て表彰を受けられたる　櫪俊蔵門君

主人亦嫌然として君の境遇を怪しみて問ふ、君乃ち實情を仔細に述べて安泊の所在を問ふ、主人亦嫌然として自ら宿を貸さんと欲ずして、君喜びて

人若し上毛に遊んで製絲家を訪ひ談會々製絲改良者に及ぼし必ずや強星野長太郎、都筑利重、荻原誠太郎の諸氏と共に嘗て正次郎氏名を聞くべし、更下仁田社ありて設ず社に月産百貫展出して結翻經營せり、然かも本邦絲今日の現況を誤れる所あるも君爲つて力あり、いでや君が生涯を概觀して其心動に吹見せんかな

齋藤正次郎君

上毛の製絲改良者

劍道を嗜む

小諸出て……淺間の山に……の一句、聞く者皆感然として嘆賞せり、君の家は代々農業にして、君亦小諸出

●第三回總會に於て表彰を受けられたる　小林くらゝ子

後、鬼川三百年の榮華こゝに滅れ然る維新の前勉事に從へり、耕するに及び風起雲湧の志を抱き、農業に寄す時々此種の

暴徒の兵站部となる

明治元年廢藩置縣の令布かるゝや、富岡地方の村民中、所屬藩の撤底を以つて無政府なりと解し、四隣相誘ひて一團となり博徒、俠客の輩之が棟梁となり日常脅迫せる名家、富商、米穀商、演劇師（演劇は當時生絲を任入れて横濱の生絲屋へ賣込める者なり）等に强請して金穀を出さしめば直ちに火を放ちて之を破壞、燒滅せしが、此團體漸次大となり、一戸より一人は必ず之に加はることゝし、若し背ぜざれば火を放ち、財を犯し、以て强迫的に其團體に加入せしめ、日夜次々各戸を賣を果し遂に宗家をして全からしむるを得たり、君が措置亦賞すべからずや。

甘樂社長となる

君は明治七年居村小澤村戸長となり、村治刷るべきものありしが、又風に公共事業に意を注ぎ、衛生事を奬勵し、よく地方働業の實を擧げしが、就中當時地方の特產たる生絲の粗製濫造盛に行はれて、全村の富源の枯るゝ事を知らざりし時に當り、よく萬難を排して其弊を矯め以つて日本生絲の今日あるを致したるもの眞に君の賜なりといはざるべからず。

即ち君は明治十二年地方生絲の濫造を憂ひ、日夜之を法に席心し、郡内有志と謀り、自ら率先して虛繰製絲共同販賣の不可なるを說き、郡内十ヶ所の揚返工場を設けて製絲を合同販賣の緒を開き、翌十三年遂に此甘樂製絲會社を組織し、本社を富岡町に置き出張所を小澤村に設け自ら所長となり、改良、會社に加盟し、地方議員を兼ね、海外輸出を專らとし、國機家に應じて其會を察し之を用ひて夜業を奬勵し、西國に奔走して其本領を發揮せんとし、毛蟲絲を以

●第三回總會に於て表彰を受けられたる　小澤とめ子

●第三回總會に於て表彰を受けられたる　尾崎ゝ子

空手賊の刀を奪ふ

君が刻苦經營の餘恩にあらずんばあらず、君が斯業改良の卒先者としての閲歷は將に之より始まらんとするなり。

上毛の製絲界真善美男正矢鄙君

明治十六年十二月十三日、始も君が甘樂社長たる時なりき。横濱より爲替金二萬餘圓を受取り自ら二萬餘圓を携へ、直ちに飯能に着し、君二萬圓を拠して高崎に着し、車を騙つて歸へる、伴者銀貨を拠いて高崎に着し、車を擔して後車に在り、車夫の後を斬る、車夫上聲を因かして襲はんとす、君車を下つて彷の家に入り二萬金を投じて靜かに椅子を得、炎如之に抗し壘心流の寇を以つて賊の白刃を奪ひ返つて彼を斬らんと擬す、賊恐懼して逃走す。

下仁田副社長となる

明治三十六年下仁田社の創立らるゝや、君嘱の理に鑑みて其社員となり、推されて副社長となる、爾來社長を補佐して同心協力茲に社運を鞏固ならしめ、事業の改良を謀る、内外國の信用を博して上毛蚕絲界の一位に至らしむ、始めよりこれに至る迄前後三十餘年間、其苦辛經營するところ永く人として君の德績を表彰せられたるとや。

君が性行と家庭

君人となり溫厚寡黙にして品行方正、勤儉にして面も忍耐に富む、又貧つて人と爭はず自ら譲を持して着々其爲さんとする所を敢行す、君人となりや、君三男二女を始めとして家族十四名あり、長男は分家して家督を繼ぎ、次男は分家して三男は軍に一年志願兵として入隊し、終へて將に米國に遊ばんとすといふ、而かも家庭和氣藹々として些の雲影を見ず、君の細緻も亦極れる哉、吾人は斯業の爲め、永く君の及君が一家の健在を祈るものなり

●第三圖飯能會社の工女監督
中澤もと子
（写真は裏を結つて紙にて巻かれたる）

●第二圖飯能會社の工女監督
本田ちい子
（写真は裏を結つて紙にて巻かれたる）

横濱市場

十二月中に於ける横濱生絲市場の光景は如何であつたでせうか、例に依て其概況を記しませう、十二月中旬は其上旬の市場は、目立ちたる商内もなく、至極沈靜で、相場も下押の狀態でありました、併し十一日からは安直ながらも相應の賣行きがあつたので、人氣も幾分引立ちましたが、又々十六日から面白くなる趨勢となりまして、相場も九百十圓の安直に持合て動きませず、ドーなることかと只管雲行を眺めて居りますと、愛十七日には折返絲は在荷薄の爲、一頭馬十圓の高の八百六十圓で手合がありました、併し之とても從來絲安の安直に在つたことですから、何等注目の價なき反對に、虚絲の如きは十圓安を見てしたのです、年末にてもなつたならば幾分絲價の引締りを見てあらうと、期待して居つたのに、却て期待かる、商狀とは同人も案外の感に打たれざるを得なかつたでせう、ところで初商内の商談が二十四日頃からボツ〳〵開始せられたので、市場は大に活氣を呈し來して、相場は信州上一番九百圓、虚絲五人組が一千圓に持合ひ折返生絲は五圓安の一頭馬八百五十圓となり、其他開西のなども五七圓方の安値を唱ふる有樣でありましたが、年末資金の關係から賣人は多少安値を忍んで賣り出した傾きがありましたので洞商の手合は六千六十個と云ふ多數に達しましたけれども、マダ本年に持越したる在荷數量は四萬二千六百十八個でありました。

これにて十二月中の入荷其他のものを昨年の同月と比較しますれば左の如くであります。

四十一年十二月

入荷二萬四千〇五十一個半　一萬八百八十三個半　六千五百四十個半　増
繭屑一千〇七十個半　二千八百六十七個　一千八百三個減
手合二萬三千二百二十個半　四千八百六十七個　八千三百五十三個半増
賣り二萬千四百八十個半　一萬〇六百四十二個半　一萬千百二十八個増

右の表で一目瞭然市場の成行が譚りますが、扨て價格はドーであつたかと申しますれば左の如くでありました。

四十一年十二月　四十年十二月　差
最高平〇五十五圓　千百十五圓　六十圓
最低七百六十圓　九百二十五圓　百六十五圓

で今參考の爲に昨年一月以來の最高價と一昨年の夫れとを對照しますれば左の通りであります。

生絲最高價月別前年對照表

	明治四十一年		明治四十年		價格差
一月	山形縣石黑商製絲	一、一一〇	山梨縣矢島組金太	一、三一〇	二〇〇五
二月	山梨縣矢島組金太	一、〇四〇	山梨縣矢島組金太	一、三〇〇	二六〇
三月	山形縣清水屋社太	九五〇	奴阜縣金徳製絲	一、四〇〇	四五〇

明治四十一年十二月自一日至三十一日生絲集散表

傍左に十二月中の生絲集散種別表を掲げて參考とせんとす。

| | | |

生絲集散前年對照表

御左に本年一月以來の生絲集散の絲況を明らかならしむる爲前年對照表を示すとしなせう。

| 年月次 | 持越 | 入荷 | 賣了 | 繰糸 | 散逸 | 繰糸 | 散逸 | 繰糸 | 散逸

新知注文も来ず、後に補充口の引込位に過ぎなかつたが、月半は頗から券後絲の荷揚さながら見え初めれば、實子は、たちあいで提燈を刷り、相場は二百五方下押して八百五十圓となつたが、實應する銘合を見、取つた見越絲、最早落ち技広なり、いで直頃の買物引込んで、儲けと、手合仲手も強烈合氣な合ずでしたい、かも行はれたが、時に取つて後にも立てて、邪魔になるは定期相場、発物八百一千圓の安値な現たに恵路買も鞘小高い、最早、落ち、一番八月に入つた仲間は花の咲くの山商はかゾりにこて、横咲くの山商が降ると云ふ、恰無類の勇気に乗たが生絲市場は八百二十圓と云ふ恰度な出たる外、慾つた敬氣も来らずりしが、直頃が直頃なれば、にや、買手も強手強腹りが、に、黄昏相場、直行き八百四十圓に引返したれど、敵て品潮になりたると云ふ、なれば、頭上重く即の花くたしに五月々迎へた所来國商の注文を受けたる日もあり且新絲の発賣も現れたので人氣も引き返し、八百七十圓藥に戻りかけた頃、豆州松崎蚕絲静岡など早繭出廻り、欧洲及那ドもとの入荷ありたれば、一時八百七十圓藥に戻りかけた引揚絲況は、斉しく八百二十五圓の安値を倒す迄に至つて、六月に入つた、最早新古絲の端境となり、荷主は八百二十圓見當の底意に不安さたる時め、直廻り狙り居たる買手は、逸々先途、引き込みたれば、月の中頃に早や品薄を告ぐるに至りたれど、買手は良安い古荷に買の思ひたるので、欧米人機業界会所と見れば、……相場ちずの不振……なるのみか二三有力の機業家破産ぜりとの飛報あり、為にて引立てる氣配も見えざりしが、十八日に新絲上一番格は、八百六十圓で初手赤合となり、緩い場面に格氣を持ち逃に九百四十五圓藥に戻り返した、此頃物を見込んだ定刻は発物九百五十五圓を云ふ高直を表して、引き立つこと見えしか頭四つ、跡盛々は氣に疑はなかつたが、現物相應の買行なり、在荷は荷薄の発賣となつて、愈新絲出廻りの七月に入つたが、相場は引立たのなかりも、原繭仕入値時の直段が直段だけに、手数も好くく蔦除相の買相を見るに至つたのは聊か強い、九百五十圓と跳れたのは、先物九百七十五圓と飛んだので、買手は見逃り勝ちとなり、月末に至つて却て下押しの気となり弥不申と謂作らざるを得なかつた秋先き月に至りては銀地の下落の路に支那絲の賣行、一層敏活となり、伊太利も安賣を始めたとの事に、商識々しから

問答

秋蠶種の浸水及其他の件に就き質問

栃木縣 通常會員 齋藤次郎吉

一、秋蠶種に生種の郷の一部に黴発生する所謂目付を発する約一日前に硫酸を清水に浸し流石に蠶箔のものに乗せて蔽り時に蠶の発生率極等一に して、飼育容易なりと云ふ説がありますが示唆蠶見を虐殺せしむる感あるも如何でせうか。

二、蠶の絶種及び改良を為すに資して早種の繭蛾と乙種の繭蛾と交配せしめ、又は反対に乙種の繭蛾と早種の繭蛾とを交配せしむれば、早種は何れの系統に類似しますか。

答

學藝委員 農學士 林 鶴 作

一、蠶種の孵卵率は適度の温氣を要するものであるから、氣候乾燥の場合には種紙を清水に浸し、其後生を使用なられしかるとも、此の場合は直接種紙を浸水するよりも、孵卵室に温氣を補給し間接に水分を與ふる方適當とする、但生種の発生に先つこと二三日前、孵卵室を清水にて洗滌するが如きは、却て無害有効である。

二、蠶の掛合をなすときは、其子の性質は一般に母蛾の性質に近似するものである。蠶の着色斑紋、繭色等は、雌雄何れか其濃厚なるものゝ方に近似するのである。

乾繭器に就き質問

島根縣 通常會員 安部常助

繭乾燥器には種々の方式があるけれども、副業的養蚕家に適する小仕掛即ち一回乾繭量一斗位を、完全に乾繭し得る方法ありやと左の件に就て伺ひたい。

(1)機造材料 (2)機造略図 (3)温度温度 (4)蚕殺法は熱湯づけか定蚕か。

答

學藝委員 永井米藏

一、最小規模の乾燥器は別紙図面の如く乾燥したる木材を以て造り、三面に紙類を貼し、一面に口を有し、上部気抜を付け下部には金網を張り、繭の大中に落ちぬ様にし、器中には竹を用ひ棚を作り、各棚に繭籠を挿入するのである。棚と棚との距離は図面の如くすれば良い。

次蚕を用ゆるか、●滋賀縣山中製絲合名會社工女取締小河原定子

改に上面を掘下げて、蠶とし其中に吳大な入れて、又、冥い、冥大は器の中で火に接べて想の出るる様になつてから儲に入れ、其上を濃厚な其で蔽ふがよろしい。

調湿に示したす

一、乾燥温度は摂氏百八十度許とするがよく又棚の上下に於て不同ある為れないから、時々籠の差替をすることが必要である。

一、冥間の如き小規模の乾燥器にあつては、蚕殺が無効であつて且利益であるやうである。

桑を植て辯護士となつた成効者

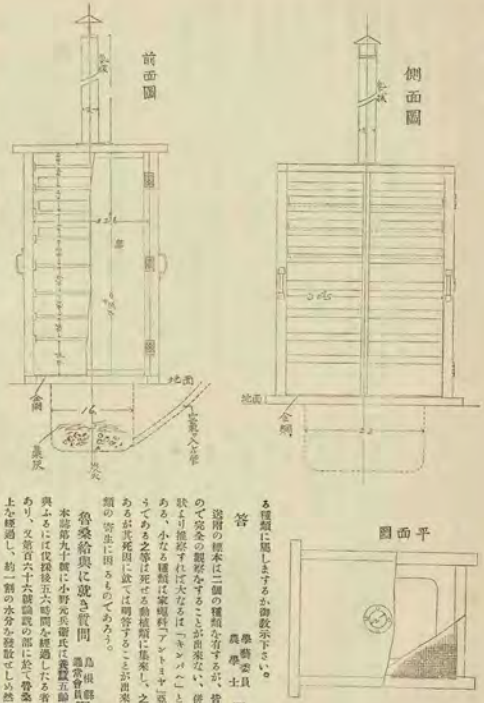
昨年執行された辯護士試驗及第者の中に森保助三郎と云ふがある、生聲を擧げたのは廣島縣雙三郡田幸村當年取つて三十歳、弟の一良と親子四人の暮であつたが、助三郎は學校の卒業してから尚一層勉強し一度は東都に遊學もし法曹界に立たいものだと父の茂助に話したが昔し堅氣の父親は許さなかつた、が思ひ立つた志は思ひ止みがたく、一層のと踏力でやつて見ようと、荒蕪の山林三反歩を拓て桑を植え、或は業で賣り或は養蠶して貯蓄し餘暇を利用して勉強し、三十年論定試驗に合格してから一層力を得て早稲田大學の校外生となり勉強に怠らなかつたが、三十八年に及んで弟の一良が師範を卒業したので弟家を別に分け父母の扶養を頼み置き早稲田の法律專門部を卒業後二年目で見々と及第したとは近頃の立志談である。

問

繭に就き質問

岐阜縣 通常會員 井川茂兵衛

繭付稚本の如き繭が桑樹腐朽の個所にも數枚死して居ましたが、此場合如何な



る種類に属しまするか御教示下さい。

答　學務委員　農學士　明石弘

遺附の標本は二個の種類か有するが、骨體脆弱が破壊して居るので完全の觀察なすることが出來ない、併し其蛹態と無駄の形狀より推察すれば大なるは「キンバエ」と稱するものゝやうである、小なる種類は桑蝨科「アレミヤ」亞科に屬するものゝやうであるが其蛹態は桑蝨科に集來し、之れを食とするものである、其死蛹に就ては明答することが出來ないが、恐らく前類の寄生に因るものであろう。

桑葉給與に就き質問

島根縣 通常會員 野津倉市

本誌第九十號に小野光兵衛氏は養蠶五齡頃盛食期に於て桑葉を與ふるに從從後三六時間を經過したる者を給すると宜しいとあり、又第百六十六號論説の部に於て桑葉は採後二十時間以上を經過し、約一割の水分を發散せしめ然る後給與するが宜しいとありますが、前者と後者との給與法は何れが蠶兒の發生上宜しいでしやか御明教を願います。

答　學務委員　農學士　辻保次郎

貯桑の方法或は桑葉の寒暖乾濕等に依つて異なるから、一概には云ひ難いが貯蔵の長きよりも短きを以て宜しとするのである。

風穴蠶兒の變態に就き質問

埼玉縣 通常會員 根岸善吉

秋蠶風穴種の初眠過から二眠迄の間に非常にアヤを引くことがありましたが之は何の原因でせうか。

答　學務委員　八田達也

風穴種の蠶兒が就眠以外の時に於て「アヤ」と稱して蠶座に絲を引くのは、高温なる際に飼食の遲れた場合とか、空氣の聚散する場合とか、盛食期の夜中給桑の不足した際等に見る現象である、總て蠶兒か他回の苦悶なる際に於て「アヤ」を引くものである、故に總て蠶兒か他回の苦悶なる際に於て「アヤ」を引くものである、故等の蠶は幾分虚弱に陥る。

第三圖　長野縣六文錢會員會社工女　榮町　ヨキ子

彰表を結ぶ會總於て

一、同　製造者の同種類にして同風穴に貯蔵したるを常一號第二號(但五日間の差)而穴したるものが、第一號の發育は五分位第二號の發生は九分の結果を有したるは何の理由であるか。

二、甲乙製造人の異なる同種類の者を同風穴に貯蔵したるを甲乙共に第一號に再穴したるものが、甲製造者の蠶兒の發生に九分の結果で乙製造者の蠶兒は五分の發生なるも發育に至極良好なるに反し、甲の蠶種に九分の發生なる蠶兒の發育不良でありましたに但し兩者の製造に係る全部の結果同一)此甲乙兩者の結果に大差を來したる理由を御教示ありたい。

答　學務委員　八田達也

一、宜問の第一號出穴第二號出穴五日間位の差にて發生其他に決して異異なる生ずべき筈ではない、右に華氏出穴後孵化中、又に孵育中に於る氣候と取扱法の如何に依るのであろう。

二、甲乙兩種種共に同室内に於て飼育したものとすれば、發生其好にして結果の不良なり上甲種に蠶種製造後から風穴へ貯蔵する以前の保護が不完全なりしに原因するものであろう、但し同一風穴内で貯蔵箱が異なるとか、若くは或風穴に於ては貯蔵箱を置いた場所の異なるに依つて發生其他に異異な生ずるものであるから一概には云ふことが出來ない。

秋蠶飼育に就き質問

鳥取縣 通常會員 山田直治郎

一、秋蠶四五齡中非常なる高温即ち日中は九十二三度に上昇し、爲に蠶室の南方は除に陽熱甚敷故雨戸なり、又は水を散布して、或は青草を敷きて温度の下降を謀り他方に出來得る限り開放して居ります、斯の如き場合の結繭に蠶兒の含する限り給する方がよいですやら、又清水を注ぎて給桑するのは如何ですやう、又桑付等の場合には如何したならば宜しでしようか御教示を願います。

第三圖　山形縣松岡製絲傳習生　多田　チヨ子

彰表を結ぶ會總於て

二、雷氣ありて風なく蒸熱甚敷時、四方に出來得る限り開放しよ、すけれども居宅等用の蠶室ですから炊事等の爲め、折々火を焚き火が爲め一二度温度の上昇することがあります、之は差支有ませんか御明教を願ひます。

三、日中九十三度の高温となりたる時若くは雷氣にて蒸熱の時などに蠶兒が眠中であつた場合に如何なる取扱ひを致しましたら宜しでせうか御高教を願ひたい。

答　學務委員　八田達也

一、秋蠶飼育社蠶別になつて日中非常の高温且乾燥であつた場合は貯蔵の如き手段を施して出來得るだけ室内の温度を下降して涼風に力め、桑葉は可成新鮮なるを要し出來得る限り蠶兒を下に敷き、給桑の乾涸を防ぐの目的であるから此場合蠶機に必要な撒布するは差支ないが、それには給桑に先だつて清水を霧霧狀にして撒布し、撒布して

與ふる為良い。若し此壓蠶兒が桑付前でおつたら温度降下の法を講ずると共に蠶が未だ二三割あるも餌食すでなければならぬ場合もある。但し此蠶は必ず眠期に至つて二日に割付なければならぬ、それから日中高温なる所に光も注意を要する。

（二）蠶の不足ゑぬ様注意せざれば密閉の害を来すことになる。

（三）熱の異なして風の吹き折には空氣中に湿氣が多くて飼育中充も困難なる所である。此際少許の火を焚くのは換氣と排湿に利益あることは故時に之を行つても良いが、併し室の開放と天窓の開放なしと且つ壁の除沙を行つて殺沙を塩殺さぬ様にして蔟くが肝要である。左もないと生々鍬の腐敗を他がすることになるから注意すべきである。

三、第一の場合に於て蠶が眠中なる時は温度降下の方法を講ずるは勿論が蠶座が過度の乾燥に陥るを防ぐ、七割以上起蠶が出たら網掛けて其上に給桑して起蠶を呼出し之を別箔に移して給桑を續くるが良い、之を強て普蠶の時の如く一時に給付せんとすると早過の蠶と遅蠶が喪失せしむる心配がある。若し氣候が第二の場合であつたら室に開放に換へ蠶兒が失張り二日にて給付するが安全である。

蚕種時間及其他の件に就き質問

三重郡 通常會員 **鶴田清次郎**

一、春蠶種及夏秋蠶種に蚕種時間何時迄が最も適度と考へるか

二、交尾中嗜眠蛾が落ちて直ぐ産ませると可否を伺ひたい

三、風穴貯蔵所の最も宜しいのは如何のものですか。

答 蚕業委員 **土屋泰**

一、蠶蛾は産卵温度七十度以上の場合に於ては一時間交尾せしむれば、産卵の上に何等の異常がないけれども、多数の蠶蛾中には時々無精卵を産出するものあるを以て交尾時間は通例五六時を以て適度とする。

二、採種用蛾は交尾せしむるものに限るのである。

三、乾燥貯蔵庫を貯蔵する目的を以て名地に風穴を使用する者に於て多い悪等の風穴中には構造後間目浅くして可否を例し難きものも少くないが、従来の成績に依見るに、毎年貯蔵数万枚を得つゝあるものは概れ左の五つである。

長野縣南安曇郡松本村前田魚市所有　　稲荷風穴
富士郡静岡市山田町字魚市所有　　鄙風穴
長野縣東筑摩郡東本村小池八幡神門所有　　小諸風穴
同縣北佐久郡小諸町字大工所有　　光風穴
同縣上水内郡戸隠村字堀西村村屋居所有　　光風穴

蠶兒の清化運動其他の件に就き質問

長野縣 通常會員 **吉川又五郎**

一、各令間温度七十五度前後に於ける給桑一回に對して清化運動休止の時間如何たい、それから又蚕数成績あれば併せて御教示を願ひます。

二、繭の際に於ては如何なる場合でも、初繭百分の現出を来すもの、若し現出したならば他の品種間のやうに物別等に於ける百分の含有量に於ては如何なるものでせうか。

三、驚病度合に於ける百分の含有量に於ては如何なるものでせうか、或時の成績等はありますまいか。

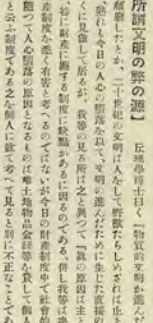
答 蚕業委員 **土屋泰**

一、蠶の食桑、運動、休止、等の時間は蠶齢の異なる毎に異つて同じとない、又同齢に於ても發育の程度に依て異て来るもので、概して云へば蠶兒は食桑時間短く休止時間は長いが、蠶の温度が強く保たしめて、各齢蠶に適き清化運動をまた無いやうである。

二、百繭の重量に於き數字的に試驗した成績の公表せられたものは無ない、然ども一般の實績に依て推定する時は、国際の事情不通常の場合の平均繭量は、苦らさる場合に比して少ないやうである、右の場合に於て初繭熟に於て産卒せる初繭分は、他の成分に化成せらるゝものと信じて間違はあるまい。

三、国種の悪変して制蔟後の三日に補探し、各百水分量を比較した成績は次の通りである。

種	第一論	第二論	第三論	第四論	第五論
表	八〇、二一	七七、一九	八〇、四七	七五、五四	
裏	七七、九七	七六、八八	七五、八八	七六、九二	七五、三六
夜	八〇、八七	七九、六八	七七、五七	七八、二二	七五、七七



【所謂文明の弊の源】

丘鴻厚行士曰く「物質前学問か進んだために世道か頽廃したとか、二十世紀の文明に人々として堂獣たらしむるには良い結果である、文明の進んだために出た直接の結果である知くに見做して居るが、我等の見た所は之と異つて「文明の進んだ結果は物質、特に娯楽に関する制度に缺點があるに因るのである、併し我等は決して文明の財産制度を悪く有害と考へるのではない、が今日の財産制度中で社會的生活に適せずと思つて人心恐慌の原因となるものは唯土地物品金銭等食食して人が利子を取ると云ふ制度である之を個人に就て考へて見ると到に不正なことであると云ふに止れわれは社會全體に及ぼす影響を調べて見ると頗る有害なものであることは浪費道ふ奢侈を誘ひ貧者は益々貧しくなり怨の人心恐慌を生ずる者と、惰で生活の立ち難ひ人間者と云ふ結論に帰する現今の財産制度の缺點に存する信ぜざる為ない個人者の社會生活の進歩を結果と見做す如きは原因を取り誤れる頗る見當違ひの議論であり所謂ある論の驚く世に行はれることは我民族の特来に驚くべき現象である。（中央公論）

答人は博士が認めたもうゝみが無因であるとも云ふことに会点は賛成する。

但然者が答人の思考して居ることに疑しかである、乍之之が矯正法に至つては、今の事情の下に於て唯各自警覚のみ云ふと外に協力を拒て眼むる心苦しさ信点外であるが普論の自由な者ども思問に曳て、数々幸苦の農民が眠の

【人間最高の樂】

浪速陸鎮員吉者鎮員田保正次氏曰く人間には各々樂しみと云ふて云ふあり樂しみかを知しむと云ふ事で、人間一日しなかも良ければならぬ事であるから相対的的に不可いと云ふわけではないが、願くは人間の理想として、最も高尚な樂しみを以て樂しみとしたいものである、最も高尚なる樂しみとは何かと云ふに「思ふに若正次は不幸にして貧乏なる為て病気下の踏子に悲苦をすゝむる他に於て我が眼を開き云ふ幣に到しては如何なる事情でも顧る事なく敢て貧窮するのである、身を殺して仁かなすてなかれと云つてあるが仁かなるのである、身を殺して仁かなすてなかれと云つてあるが仁とは何ぞ、人の道に仁なる者は小なるものの二三の点に仁なる者は小なるものの二三の点に仁なる者は小なるものの二三の点

べき個人なりとするも翼に単に長賃金の高低に基因するのみ故に之に対する農業政策今日に於て根立せずんば後日帝国の始末もん也に陥られず是方今の政治問題中最緊要のものにして現論上より又世界の翼状より観るも農業政策問題は重要なる問題なりと(農業世界)

若人は政治家の全部を駆げて此問題の攻究せられんことを希望して止まぬが、あわれ客を手として現実の星たる悲ある仁情なる嘆みなれ、左方にても我あるを知りて、子孫のるを知らねアも政治家に仁情かる深遠な問題の攻究はチト注文が無理ぞ

【水産銀行】

前議会提出の水産銀行設立に就ては多分議員間から提議し、政府和解の主張する情福不安福の日翼に農業法の一部に改正加へて農業組合合法人として設立を計らんとすと云ふ話なれ、近時農業士恩田熊蔵氏曰く「近時栽培整理事業の偶起暮及せること掲に観然たるものの翼に邦家の興隆として欣一歩を進めて経済上の個個如何を対峙せんに単に耕地整理と共に漸次に邦家の興隆を期待せんとの

蠶桑雜報

●蠶業大辭書乙夜の覽を賜はる

昨年夫に漸く完成したる蠶業大辭書は、一般産業界の一大共業として世に公にせられたるに、其筋の命に依りて、之を宮内省に献納あらせられ、又、之に関する編者の功績なるのみならず本書編纂者一般の一大面目とする所たるべしと、聞く所なりと、因に記す蠶業書院は之を為す上の発奨と為し之を読者に更に一層の研究を為し、一旦定価千五圓に復したるも、尚ほ特別割引の恩典を為すといふ。

▲米鐵運賃と影響

水野運輸局長官は、一月一日より貿麻ゼラチン、鉄に米鐵會社運賃引上げの希望を通じたるも、太平洋航路の有する競争航路會社に八月十日シャトルに於て通じ運賃の部分たる所汽船取扱業者の意向を調査し、同月三日のカナダ関係會社大會に於て無条件に撤廃なりしも此頃より加奏陸海運賃に於て確定を見るに加はるべし、但し運賃は減損運賃に於て確定を見る東洋汽船、東洋汽船の為に、太平洋航路の為に、太平洋航路の為に、太平洋航路

▲ヤッ課つた煙草問題　明治三十九年の秋山型に開ける水會臨時總會に列せんとし、故早野長次郎氏　壇下の一行に謹れて甲府市に乗り、魚通無名館にて「旦那御前ぼドチラですか」と、氏曾てんと訣して其名を惑る「ロッヤンマ！　隠かいやうな名のつた宿屋がお」と現官所西して其名宿屋に出でアヤ、ありて突然聞を打つて「ヤー課つた煙錯と大呼す、東夫ツヤと吹き出して曰く「旦那ッヤー　隠宿ですッ」と……氏頭上より湯氣を立たせて「ッヤーふ御煙管か」と、食品屋を嘲る……頭上の湯氣現つて富士の煙とかりまこは淵ー味……

▲男女両性　吉池理事来訪の客を提へて女子慶應塾誌編錄發行の禮言を謂々說て曰く「知らず、毛呂白鳥子毛呂正穿氏此頃常に白鳥を持すると云て此名あり」應て感謝するの人知らず、他の人々に謂つた女子慶應塾誌編錄だつて男が讀んでも猛るいことはなかんべ、氏時や学生に讀ませて外外讀或る婦に讀ましや、讀て眞かんべい、一想両得とは此事だネー君！と……偖へのこ一人タスク！笑つてアヽ男女両性かネー。

文藝

花ちゃん

重富タヅヽ星

三ことりと四りこと勢よく可愛いい聲で數へる聲が、外知の松かぶりの座にはヤき鍵て居たが、急に五つものといかけて、顔を敢ふて家の中へかけこんだ。十三三の女の子お有る。相手なしで居たのは十六七の、何處となく愛らしい面やかは有たが出嫁と雖とに自嘲を帶いて有たので、少し淋しみ氣味の面持が、昼愛らしいを加へた。今紬の無女たちの、春ちゃんがニコ〳〵門を入つて来たので迫羽子にまけた。ひろちゃんばねられた顔の淡かしさと、紬のお花に、春ちゃんの来たのを知らせようと、かけこんだのであつた。日向ぢきの縁側には七八つな圓に四五人の女の子が、松立て竹立て子供の喜ぶお正月と、聲かぶりにでもわ座なつて話つまをして居た。

「芳さんマー大きくお美しくおなりですことネー、あけましてお目出度う」と、すみ淋つて一寸帯びしつた聲に、氣が取られて遠の手をやめて、いたいけざかりの御祝件なんぞ聞つて居た毛毛は、芝はづみに飛んだので、目尚の縁に、ゆらゆらと倒つたがゆふで「ヨー昨夜かへつてよいちつしゃいましなと倒したがゆふで「ヨー昨夜かへつてよいちつ巻。お客様が有つて？」「イヽエお女さんと御守なのよ」と謂詳する風情を見て芳野はつけ加へた。「ッヤーふ」と軽く會釋しながらすれ〳〵に非ムて門口たえつた

「オヤ！ふれ！」と驚ちつの法悲で、待ちこがれて居た花ちゃんが聲をかけたので、早く逢のひ、ちゃんから煙然やつて来ましたの！」と云ひながら、上のたもの、花ちゃんが髪に結つて居ようなかつたので会なからず思い出が、初めて昨日縫つてよいはれた行賞を思ひ合はさたにつて新年の挨拶をすすわネー、オヤ〳〵自分ひとりいい氣になつて御祝ひ言ふことも忘れて居ました。近頃大部御重態だらそで御目出たふ御座いますヤ。やはり只今でもの御紬会社に御勤めて御座いますか。ろ〳〵一日お窓つて居ります。御祝ひに預つて御勤ふ「ッヤ！紬有ふ御座いますヤ。ろ〳〵一日お窓つて居ります。御祝ひに預つて御勤ふ御座いますヤ。」と云ふたお春代に取つては話しの向き合ひ自分の指ほる方向であるだけ嬉しくもあるし羽ふ出見の明ふ出るる嬉な楽しもしたが、踏み深い春代は無謀な花「ふ」にはの今那へ行け春ちゃんのくゝ、もお思ひますわ。あなたが逃めて下さつた時

問も聞だが在りますのさああちら」と促して茶の間へ入つた

○○高等女學校へ通學中は無二の友達で、往き来しげく、見弟よりも親しくして居た間柄であつたので何かに付け思の商多い茶の間であつたが、今宵遊ぶ入る同時に、今日と改り明日の迎ふる年の月の四識終たから御無沙汰しました。

春『今日御話しのあとなたです』と問いた

花『何だ東京の製糸語習所に御勤めなさる先生だとに聞いて居りましたが御名前は迷ア忘れましたの』

春『そふ矢つ張り私達の先生でせうけどもどなたか知らんム』と小首かしげて

秀子の進む方茶かすりつた

『姉さん御用がありましたら今宵遊ぶ入る項戴な、ひろがれ色擬つんだつてヤイ〜言つて居ますの』

花『ふ頁けて御やりなさいな川ヌフレルさんネと見返つて話しを春子に轉じた

第三回三等絵画 山田聖龍嬢製絵備工女 小林ミヨ子

ですから之が御取り置ばしたらどうでせうかと思ひますに、何んでも製糸界の大家の館で第一番に御覧遊ばせ御覧になるのですもの。ふつて花『そうですか来れば嬉しい事れ、私も逢たかりてはないヨネ私しそふ思ふのよ、全国には私と同じ境遇の人が浮山あるだろふ……伊い春ちゃん私し行きました先で一寸本を見ましたが矢張り夫れ〜にて術語がありまして、判らぬ事もありますのネ、これには困りますわ

『其ならば昨年十二月発展しました製糸大会書物御買ひなさつたら如何でせう、私も見本を見た計りですから好く知りませんけれども、天覧が賜つたとふ御題に御ざいますから、これは詳しくいろんなことがあります事と思ひますのよネヤ御免遊せ先生風取りにて下さいませ』

『イヤ〜有難ふにあなたの経にへ〜〜云ふて教へて下さる人はないわと云ふ間に正月の祭り、居旅を厳せた美しい姿が浮ばれた、そともに「羽根の音が浸み響ひて、嬉の聲が聞える

＊　＊　＊

場合も場合、時も時、久しぶりの御客ではあるし今日な外しては亦、斯ふ云ふ御もありやなしやとの、花子の母の厳選がちらつてあるふが無事の御縁走な井べて居旅の恵もつ通り過つた、やがて秀ちゃんやお御招待や御相手やの御相手もやつて貰ひ、嬉しく思ひ

懸賞募集 狂句

（第十三期拔萃）

金坊子選

（應募數三百五十句）

下駄に曰く結びの神は鼻なり　武蔵　神田

病は鼻に愛考品と教師云ひ　三河　岡丸人

親は鼻に掛けほめ過ぎして居ち　信濃　朝倉木々

人前は鼻を持て下女が眞剣と鼻み合ひ　江戸　羽前央

一大事下り鼻に突つかれた與太郎　牛込　群馬寸

食ひ盛りに鼻つまれた與太郎　南　宮城村

上鼻に鼻入人の笑鼻時　丸　福島海人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　群馬川

夜鷹の鼻み鼻に鼻入人の笑鼻時　青森　刀川

鼻に鼻入人の笑鼻時　宮城　群馬田

鼻に鼻入人の笑鼻時　福島　梨子

鼻に鼻入人の笑鼻時　村　甲斐屋

鼻に鼻入人の笑鼻時　海　愛知風

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　長野

鼻に鼻入人の笑鼻時　木　甲斐

鼻に鼻入人の笑鼻時　木　風

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　山梨

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　愛知

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　但馬

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　下

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　桃

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　川

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　村

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　峰

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　子

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　風

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　田

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　川

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　岡

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　助

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　凡

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　岡

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　家

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　太

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　田

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　勢

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　伊

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　信

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　遠

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　水

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　助

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　人

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　愛

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　知

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　靜

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　岡

鼻に鼻入人の笑鼻時　人　澤

人賞

先生が吹き過ぎて鼻風邪をひき　愛知　村上下川

地賞

口て飼ふ鼻の果ては掴み合ひ　下総　村咲

天賞

當り鼻姑の顔の皺がへり　但馬　田中桃村

選者吟

當り鼻此所にも悪霊比七大黒　金坊子

懸賞募集 俚謡

（第十三期拔萃）

高橋鬼川選

（應募數六百五十首）

今年や嫁とり続けさせてもしてお金な西の年　埼玉　信好

人に惚てまるっ人の鼻を好いた同志の伸びもの　愛知　雁峰子

思し鼻さん兵士で三人の爲に鼻入人の爲に鼻入人の爲　京都　寶相花

あい乙女の爲鼻入人の爲に鼻入人の爲　京都　川

ほつれた髪の間に櫛やしゃ心ためた此の鼻　甲斐　天慧

鼻は戰爭で鼻入人の爲に鼻入人の爲　京都　清人

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　京都　青人女

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　羽前　東雲

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　愛知　波

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　愛知　銀

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　山梨　一登

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　岡　竹

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　滋賀　笑

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　京都　岡人

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　尾張　蕉華

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　但馬　村

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　愛知　柳

鼻の鏡とめ鼻かな見れば主にとう似た人が来る　愛知　浪山

五彩賞

鶯や鳥に鳴いたは鶯の鳴いたに鳴く　羽前　空亭

すぐと鳴いたは博多の帯あれ一人の針仕事　愛知　下川

夜鶯の音やあ止むは何か思案の花嫁御　茨城　鬼外

主紋やすぐと鶯のたゆ人に鶯の花嫁御　群馬　邦松

思の中にも鶯の咲くと墓の鶯に鶯の花　愛知　浦山

人賞

積る思ひの雪なす鶯も　愛知　村上下川

地賞

解て嬉しい鍋の中　羽前　寒河江笠亭

お蕚も可愛し此の見も大事　茨城　鬼川

天賞

湯乳しましよか柔切らうか

どうせ生ては居られぬ身體　丹波　大槻古城

情死する氣か二つ鶯

選者吟

當り蕚に座敷を取られ　鬼川

蕚蕚の魂も左右

懸賞募集 一と口噺

（第十三期拔萃）

秀逸

◎養蕚　愛知　冷露

甲「蕚鶯ひと云つかい方が悪い」乙「ナセ」甲「蕚客見て結安くては引合はぬから」

◎蕚病豫防吏員　羽前　田島伴作

女「先生私は農夫としてお働きれまして蕚病豫防吏員「蕚は農即てありません」女「デモ蕚様は蕚病豫防吏員と云ふてはありませんか」

◎明治四十二年四年　岐阜　貫道

甲「今年は命の年（鶯の二倍）去年の二倍になるは目出度い」乙「目出度いの年の年」

◎子供の年　羽前　可昇

甲「明らかに鶯を鳴く始終二年取りの年明らかに治る四十二子供の年」

◎他人の癖　山梨　一登

朱雀塾学校とありて友人の癖蕚なぬぎみて嵐ひに　教師「お前はなぜ他人の癖蕚なぞを嵐ひとした生徒「つつまれ次さんが　お前のやうな馬鹿はお働人の飯でも嵐はなければ人間にはならないと云ひましたから」

朱雀「先生なぞ云の癖が蕚ぞしますか」先生「狂言師が蕚ぞ云ふ者が居るからです」

人賞

◎歌化病　仙臺　由多賀

先生各室を視察し来たり生徒に向ひ　先生「何んか病蕚は無いか知ら」生徒「歌化病蕚は出来ません」

地賞

◎月日と出の同宿　三河　東里

宿亭主「お月様やお日様はいやお立ちになりなした、雷様はなぜお立ちませんか」雷「いや〳〵月日の立は早いものの僕は夕立にしやう」

天賞

◎ひとり息子　茨城　鬼外

甲「私はひとり息子をなくしてしまひました」乙「仕方がない二人なくしたと人もあるから」

文藝懸賞募集

俳句（毎月分ノ切次ノ月末日迄発行者各月ノ課題ハ毎月発行前月ニ本誌ニ目録ス見よ）

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　初午（梅）鶯（畑打）春月

▲懸賞　天（一人）佳作（一人）各一ヶ年分◎地（一人）各一ヶ年半分◎人（一人）各一ヶ年分

▲規則　一月分（一句ノ二人）佳作（一句ノ一人）ハ本誌ノ二月分ニ掲載ス。北一振編ノ二月分ニ掲載ス。住地ノ郡郡町村番地姓名ヲ書キ明記セラルベシ。之ニ代ル者ハ絶対ニ其選ニ入ルモノニ賞ヲ与ヘズ。

狂句（川柳）（原稿ノ切毎月三十日限リ）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　鶯鱒鬼川先生

▲懸賞　天（一人）各一ヶ年分◎地（一人）各一ヶ年半分◎人（一人）各一ヶ年分

俚謡（都々逸）（原稿ノ切毎月三十日限リ）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　鶯鱒鬼川先生

▲懸賞　天（一人）各一ヶ年分◎地（一人）各一ヶ年半分◎人（一人）各一ヶ年分

一と口噺（原稿ノ切毎月三十日限リ）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし（但し専門なるものは遠慮ミラ）

▲懸賞　天（一人）各一ヶ年分◎地（一人）各一ヶ年半分◎人（一人）各一ヶ年分

注意

◎鶯鱒ニ関する百般の事ハ見聞ノ通リ、白く思ふ事ヲ文章ニ認ム用紙ニ横ニ書キテ「鶯鱒」ト題シ一行ニ十字詰ニシテ行ニ認ヲ事ヲ一ヶ年分ニ付キ一枚ニ付キ五銭ノ割ニ賞ヲ与ヘル。

◎賞品ハ天地人ノ順ニ賞ヲ与ヘル。

◎毎月一日ニ切ル。

◎原稿ハ毎月三十日ニ切ル。

◎原稿ハ毎月三十日ニ切ル。

◎原稿ハ毎月三十

新潟縣農會組　第六〇號
蠶業新報　第一八九號
岐阜縣農會報　第二號
島根縣農會報　第二八號
中央農事報　第一〇五號
會報　第二九號
染織時報　第二六五號
會報　第三七號
何鹿實業月報　第一九號
兵庫縣蠶業會報　第四四號
生絲日報　十二月分
中外商業新報　十二月分
關西之蠶業　第四三號
山梨縣蠶業時報　第四八號
愛國婦人　第一六六號
植物學雜誌　第三六三號
衣笠蠶友會報　第三七號
武藏誌　第一號
城丹蠶絲時報　第三六號
土佐蠶絲時報　第七四號
山口縣農會報　第六二號
日本之家禽　第二號
產業組合　第三八號
共桑　第七六號
蠶學專報　第二四號
福岡縣農會報　第一六號
工業雜誌　第四〇一二號
千葉蠶絲時報　第二五號
懸手縣農會報　第九號
國書月報　第六號
岡山蠶絲時報　第七ノ三號
第一五號

新潟縣農會
蠶業新報社
岐阜縣農會
島根縣農會
全國農事會
帝國農家一致協會
大日本織物協會
長野縣蠶種同業組合聯合會
何鹿郡蠶業會
兵庫縣蠶業會
郡合名會社
商況社
關西蠶業社
山梨蠶友會
愛國婦人會
東京植物學會
衣笠蠶友會
武藏會
城丹蠶絲時報社
土佐蠶絲時報社
山口縣農會
日本家禽協會
大日本產蠶組合中央會
共桑館
蠶學農友會
福岡縣農會
工業雜誌社
千葉蠶絲時報社
懸手縣農會
東京書籍商組合
德島縣蠶絲會

大日本蠶絲會報廣告料

特等		並等	
回數	一頁	半頁	四分ノ一頁
一回乃至六回（一回ニ付）	貳拾圓	拾貳圓	七圓
七回以上（一回ニ付）	拾七圓	拾圓	六圓
	拾五圓	八圓	五圓
	拾貳圓	七圓	四圓

●會員は右料金の二割引とす●四分の一頁未滿は謝絶す●前金にあらざれは掲載せす●一頁は一行二十七字詰七十二行とす

◉本報定價　一冊　金拾五錢
一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十二年一月二十日印刷發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京市神田區錦町三丁目十八番地　小池市松
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　大日本蠶絲會
（電話本局一四七三番）

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(December 1908.)

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(December 1908.)

	Report.	Brought over.	Arrivé.	Vendu.	Sold.	Exporté.	Export.	Renvoyé.	Sent back	Ateporter.	Brought forward.
	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.
Filature.	17,775	11,163	1,708	9,209	1,630	—	—	512	63	18,591	4,610
Filature.	4,350	1,708	548	56	1,187	—	—	27	—	1,052	85
Zagori.	1,781	548	98	115	98	—	—	—	—	692	24,323
Reeel.	23,972	13,529	12,083	—	—	—	—	—	—	—	—
Kakoda.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Orikayoshi.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Autres.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Other.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Total.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

RAWSILK MARKET.

MARCHÉ DES LOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de décembre dernier.

Pendant les dix premiers jours, nulle transaction importante n'a été enregistrée, et les prix n'ont fait que baisser. Mais la vente assez importante ayant été faite, le 11 courant, le marché a présenté momentanément quelque activité. Toutefois, l'accalmie vient de régner de nouveau sur la place à partir du 16 courant et a continué jusqu'au 24, jour d'où l'on a commencé des négociations pour le premier marché de la nouvelle année. Le marché a pris alors un nouvel essor, on a enregistré d'importantes affaires, plus de 6,000 balles ont été traitées lors du premier marché de la nouvelle année.

THE RAWSILK MARKET OF YOKOHAMA.

The condition of the Yokohama market during the month of December is summarised as below.

During the first ten days, there was no considerable transaction, and the quotation also was in a downward tendency. On the 11th, however, some briskness began to be observed, but which was only destined to collapse into dullness again on the 16th. But from the 24th, the business became again somewhat active; and, on account of the condition of the available funds, the transactions conducted were rather better than expected, and indeed as many as 6,000 odd bales actually changed hands.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

The following tables show the movements of the silks during the relative period:—

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Maximum du prix. Highest prices. Noms des filateurs. Names of filatura.	Prix. Prices.
	Picuts.	*Picuts.*	*Picuts.*	*Picuts.*		*Yen*
1	456	876	2	—	Arayasha.	1.000
2	772	524	20	—	Comaiseishijo.	1.000
3	448	510	14	—	Kanrasha.	1.000
4	432	365	18	—	Gumsansha.	.990
5	443	367	10	—	Meishinsha.	980
6	—	—	—	—	——	—
7	735	411	10	—	Kanrasha.	1.030
8	658	440	6	—	Shimonitasha.	1.030
9	417	450	10	—	Hiroseishi.	1.000
10	381	572	14	—	Ukidaseishi	1.050
11	596	439	16	—	Kinphôsha.	1.050
12	435	441	37	—	Marukoseishi.	1.010
13	—	—	—	—	——	—
14	665	401	3	—	Nansokan.	990
15	496	540	11	—	Ushuisha.	1.000
16	458	816	20	—	Ichinosseishi.	990
17	657	561	25	—	Shimonitasha.	1.030
18	282	847	—	—	Nansogumi.	1.030
19	378	521	12	—	Ideseishi.	1.020
20	—	—	—	—	——	—
21	1.041	413	6	—	Tokosha.	970
22	569	287	10	—	Kawatsuseishi.	1.010
23	290	560	7	—	Konansha.	1.010
24	365	467	11	—	Yajimogumi.	1.055
25	489	326	—	388	——	—
26	429	327	10	—	Marukoseishi	1.000
27	—	—	—	395	——	—
28	880	775	98	—	Tomeseishi.	990
29	235	363	122	—	Mikawaseishi.	960
30	525	—	111	196	——	—
31	—	—	—	257	——	—
Total	13.529	12.080	602	11.93	——	—

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

Closely upon the heels of the advent of the propitious New Year and while the flush caused by a few cups of the delicious *tosu* is still ruddying our cheeks, the cable has cruelly supplied us with a sad and overwhelming news of an appalling earthquake in Italy. It may be superfluous to state that Italy is one of the four great sericultural countries of the world, together with Japan, China and France. She therefore stands in a special relation to our country, and so there exists a great and close interest binding the two nations fast together. According to the telegrams yet received here, the centre of the present earthquake is localised in the island of Sicily and Calabria, both of these places being world-famed for their flourishing sericultural industry. The number of those ill-starred victims to the cosmic convulsions in the city of Messina alone, the principal seat of Messina silk, is estimated at more than a hundred thousand both in killed and injured. And the houses engaged in the sericultural industry in that city totalled about 45,000 or 46,000, while the total quantity of the silk put out, in 1907, reached the respectable figures of 3,177,000 kilo. Unfortunately, the details of the condition of these places after the ravages of Nature's wanton hand are not yet to hand, and so we are greatly left to our conjectures and imagination. But as the news come in, we are more and more becoming aware of the vast scale of the havocs wrought by Providence' whimsical will. We greatly fear from these yet scant news that our confrères in these provinces have perhaps had their prosperous industry cruelly shattered and destroyed at a single shock. Of course, the acts of God and Nature are entirely out of the control of us petty mortals, and cannot be made otherwise. So we who are equally engaged in the same line of business, cannot help feeling the more sympathy and compassion for the ill-doomed population of the districts visited by the devastating earthquake. We hope heartily and sincerely that the sericultural industry of Italy will come out of the wonderful catastrophe quite unimpaired and unscathed, not being affected by the visitation of the fearful calamity. We express here our heartfelt sense of deep and sincere sympathy for the unfortunate people who have fallen victims to the earthquake.